

飯田市

H A B A G O N G E N D O  
**羽場権現堂遺跡**

中央新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

—飯田市内その1—

2020. 12

東海旅客鉄道株式会社  
長野県埋蔵文化財センター



羽場権現堂遺跡

羽場権現堂遺跡遠景 南から



竪穴建物跡 SB01 埋甕炉断面

# 例 言

- 1 本書は、中央新幹線建設工事に伴う、羽場権現堂遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 羽場権現堂遺跡は、長野県飯田市大休 1575-1 ほかに所在する。
- 3 発掘調査は、一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 調査期間は、発掘作業が2019年4月12日～7月31日、整理等作業が2020年4月1日～12月31日である。
- 5 本報告書の編集は、藤原直人・平林 彰が行った。執筆分担は以下のとおりである。  
第1章 岡村秀雄、第2章・第3章 鈴木時夫、上記以外 藤原直人  
校閲は、調査部長 川崎 保、飯田支所長 岡村秀雄が実施した。
- 6 発掘調査の受委託契約等については第1章第1節を参照願いたい。
- 7 本書で報告した羽場権現堂遺跡の諸記録・出土品は飯田市に移管される。
- 8 発掘調査および報告書作成に当たり、以下の諸機関・諸氏に御指導・御協力を賜った。御芳名を記して感謝の意を表します（五十音順、敬称略）。

飯田市教育委員会 飯田市上郷考古博物館 長野県文化財保護審議会史跡・考古資料部会  
長野県立歴史館 小林正春

- 9 発掘調査の担当者は第1章第1節に記載した。
- 10 発掘調査に当たって、以下の機関に業務委託した。  
測 量：株式会社 小林コンサルタント  
遺物実測：株式会社 アルカ  
遺物撮影：信毎書籍印刷株式会社
- 11 遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『年報』36で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 12 本書に添付したDVDには、以下の内容を収録した。  
本文PDFファイル、土坑（SK）一覧表、土器観察表、石器観察表

# 凡 例

- 1 本書で扱っている国土座標は、国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基準点としている。座標値は世界測地系による。
- 2 本書で掲載した地図は、国土地理院発行の1：25,000地形図「飯田」、1：2,500飯田市都市計画基本図（承認番号：1飯地計第123号）である。
- 3 掲載した実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。  
遺構実測図 竪穴建物跡 1：60、1：30 土坑 1：60  
 ただし、調査区全体図・遺構配置図・挿図などは任意である。  
遺物実測図 土 器 1：3、1：4  
 石 器 1：3、2：3、1：6  
遺物写真 遺物実測図とおおよそ共通である。
- 4 遺構番号は、遺構種類ごとに付番してある。発掘調査の過程で遺構と認定しなかったため、欠番としたものがある。
- 5 文中、表における（ ）は次のとおりである。遺構の形状は推定値、規模は残存値を示す。遺物の法量は残存値である。
- 6 土層および土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（2014年度版）を基準とした。
- 7 実測図中のスクリーントーン等は以下のように用いた。  
(1) 遺構図  
 地山  
 硬化面  
(2) 遺物図  
 石器摩耗痕・磨面  
 石器使用痕

# 目 次

口絵

例言

凡例

目次

図版目次

表目次

写真図版目次

## 第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経緯	1
1 事業計画の概要	1
2 埋蔵文化財の状況と保護措置の調整	1
3 行政手続の経過	1
4 発掘作業と整理等作業の体制	2
第2節 発掘調査の経過	3
1 発掘作業	3
2 整理等作業	3
3 普及公開活動	4
4 作業日誌抄	4

## 第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5

## 第3章 調査の方法

第1節 発掘作業	9
1 遺跡名称と遺跡記号	9
2 遺構名称と遺構記号	9
3 調査区とグリッドの設定	9
4 表土の掘削と遺構の検出	9
5 遺構の発掘と記録類の作成	9
第2節 整理等作業	
1 遺物と記録類の整理	10
2 報告書作成と資料収納	10

## 第4章 基本層序と遺構・遺物

第1節 基本層序	12
第2節 遺構	13
1 竪穴建物跡	13



# 第1章 発掘調査の経過

## 第1節 調査に至る経緯

### 1 事業計画の概要

中央新幹線（リニア中央新幹線）は電導リニアを採用した、東京都と大阪府を結ぶ総延長約285kmの新幹線の整備計画路線である。日本の大動脈輸送を担う東海道新幹線は、開業から50年以上が経過し、鉄道路線の建設・実現に長い期間を要することを踏まえ、将来の経年劣化や大規模災害に対する抜本的な備えとして計画されている。県道飯田南木曾線拡幅は、中央新幹線建設工事に伴い、中央アルプストンネル松川工区の発生土運搬に伴う安全対策の一環として計画された工事である。

### 2 埋蔵文化財の状況と保護措置の調整

羽場権現堂遺跡の所在する飯田市大休地籍は東海旅客鉄道株式会社（以下 JR 東海）による工事用車両通行に伴う県道飯田南木曾線の道路拡幅予定地にあたる。この工事には大休遺跡、羽場権現堂遺跡に係るため、飯田市教育委員会（以下 市教委）によって、2018～2019年度に埋蔵文化財包蔵地の範囲と内容を確認するための調査が実施された。

その結果、羽場権現堂遺跡に係る個所では、地表から概ね80～120cmで到達する明黄褐色砂土を検出面として、竪穴建物跡2軒と土坑15基が確認された。いずれも縄文時代の土器片、石器等の遺物を伴っており、当該期の遺構が主体とされた。このため、当該箇所は本格的な発掘調査を必要とし、それ以外は同様の調査は不要と市教委が判断した。

市教委による確認調査に基づき、2019年2月19日、事業主体のJR 東海、市教委、長野県教育委員会文化財・生涯学習課（以下 県教委）、長野県埋蔵文化財センター（以下 埋文センター）の四者による保護協議がもたれた。協議では羽場権現堂遺跡に係る記録作成目的の発掘調査主体を埋文センターとし、2019年度当初から発掘調査に着手する旨の合意を得た。また、調査にあたっては、調査箇所がJR 東海の未買収地であることから、JR 東海による借地契約の後、発掘調査に着手する方針とした。なお、2019年度当初から発掘作業に着手する予定としたが、事務手続きや地元への事前説明などにより、掘削開始は、5月20日となった。

### 3 行政手続の経過

第1表 土木工事のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第93・94条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2017.10.25	中建名第827号	JR 東海	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	羽場権現堂遺跡他での土木工事を通知
2019.3.22	30教文第726号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	JR 東海 埋文センター	埋文センターが上記遺跡の発掘調査を受託するよう通知

第2表 調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第92条関係）

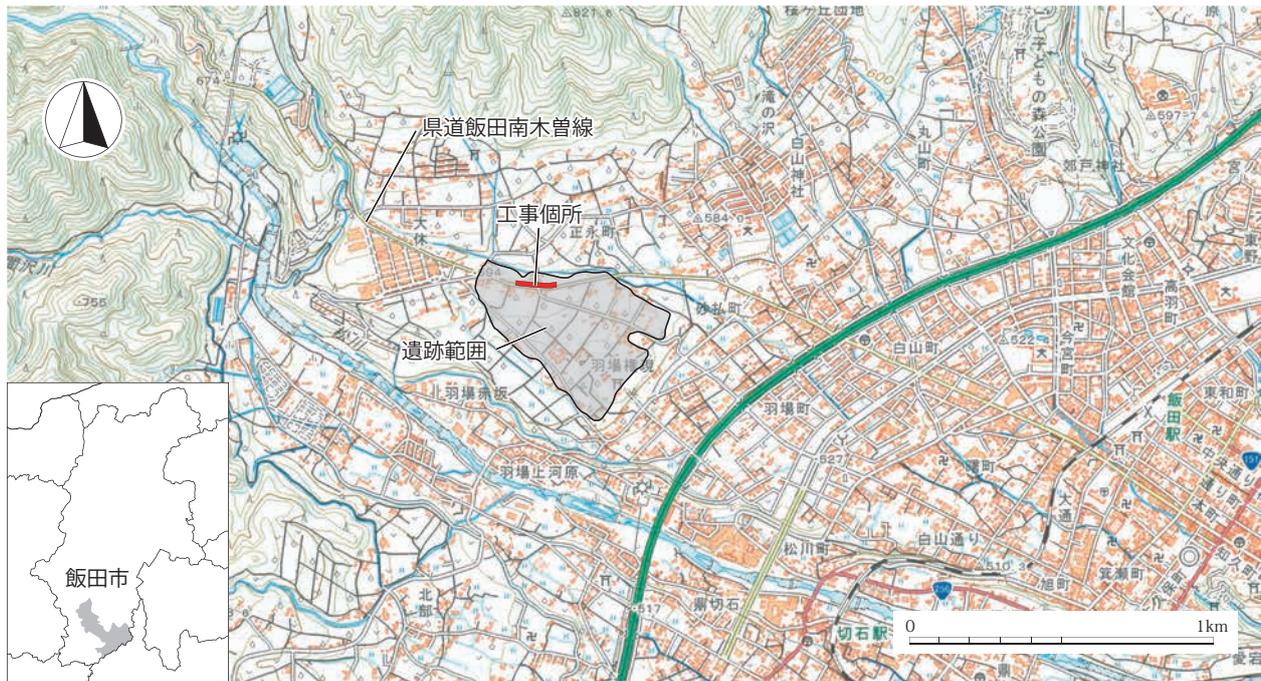
年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2019.4.12	31長埋第1-2号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	羽場権現堂遺跡の発掘調査
2019.5.7	元教文第6-2号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2020.2.16	元長埋第4-1号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	500㎡

第3表 埋蔵物の発見にかかわる行政手続（文化財保護法第102・105・108条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2019. 7.31	元長埋第2-1号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	土器・石器18箱
2019. 8.20	元教文第20-37号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	

第4表 受委託契約等の経過

年度	予算	備考
2019	20,441,597円	発掘作業：500㎡
2020	46,735,191円	整理等作業：報告書刊行、他遺跡の発掘作業を含んだ年度当初契約額



第1図 遺跡の位置

#### 4 発掘作業と整理等作業の体制

発掘調査にかかわる作業体制（作業員を含む）は以下のとおりである。

##### 2019年度 発掘作業

所 長： 原田秀一    副 所 長： 関崎修二    調査部長： 平林 彰    担当課長： 岡村秀雄  
 調査担当： 藤原直人    長谷川桂子  
 作 業 員： 金澤勢津子    中野満里子    中野充夫    西野英利    松浦善文    箕島正三    吉川 豊

##### 2020年度 整理等作業

所 長： 原田秀一    副 所 長： 山田秀樹    調査部長： 川崎 保    支 所 長： 岡村秀雄  
 調査担当： 藤原直人    鈴木時夫    平林 彰  
 作 業 員： 園原孝子    土屋綾子

## 第2節 発掘調査の経過

### 1 発掘作業

遺跡は松川左岸の河岸段丘上に位置し、現在は畑地として利用されている。本格的な調査履歴はない。県道拡幅工事に伴い2018年度に市教委が確認調査を実施した結果、縄文時代の遺構（竪穴建物跡2基、土坑15基、縄文時代の土器片・石器等の遺物）が確認され、縄文時代を主体とする集落が存在する可能性が指摘された。よって、埋文センターは用地内の記録保存のための本格的な調査を行った。

飯田市松川の左岸では縄文時代、弥生時代の遺跡が点在する。同河岸段丘上の周辺には大休遺跡、羽場権現堂前遺跡、砂払遺跡などの縄文時代の遺跡が存在し、本遺跡の東には弥生時代の遺跡である方角東遺跡や羽場曙遺跡などが知られている。また、調査地点周辺で古墳時代、平安時代の土器も出土している。

まず、調査区内を重機により、地表から深さ1.5m前後まで掘削し、人力による遺構の検出を行った。排土は隣接地に仮置きした。調査の結果、縄文時代中期初頭と中期後半の集落跡が確認された。発見された遺構は竪穴建物跡2軒、土坑81基である。これら検出された遺構の埋土を掘り下げ、測量および写真撮影、所見等を記録した。遺物は主に縄文土器（コンテナ10箱）、石器（コンテナ8箱）が出土した。なお、基準点測量等は外部に委託して実施した。

今回、縄文時代中期初頭、中期後半の竪穴建物跡や土坑が発見されたが、縄文時代中期初頭の竪穴建物跡の調査例は飯田地域では稀であることから、貴重な資料の提示をすることができた。また、縄文時代中期後半の竪穴建物跡から出土した土器の中には他地域の特徴を持つ資料が見受けられた。他地域との該期の交流の一端を考える良好な資料となるものと考えている。

第5表 2019年度発掘作業工程

作業内容		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	備考
発掘作業	準備													
	基準点設定													
	トレンチ調査													
	表土掘削													
	遺構検出													
	遺構精査													
	記録作成													
	後片付け													
打合せ・中間検査		△		○										△：打合せ、○：中間検査

### 2 整理等作業

発掘作業に伴う基礎整理作業期間は設けず、令和2年度に本格整理作業を実施した。

まず、記録類の点検や写真整理などを実施し、記録類や遺物の全体量とその内容把握を行った。各種台帳の不備を整え、遺構図や土層図等の図面修正を施した。

遺物については、種類別に再整理し、遺物台帳等の整備を行い、小型石器の注記を行った。その後、報告書に掲載する遺物の選別・登録を行い、土器接合に着手した。

遺構については調査所見の整理、各遺構の概要を把握するための情報整備、修正図をもとにデジタルトレースなどをし、掲載する個別遺構図・遺構全体図・土層柱状図・周辺遺跡分布図等の作成を進めた。

続いて、報告書に掲載する個別遺構図等の仮版組、遺物の写真撮影を行った。さらに、調査成果の総合的な検討を行い、原稿の作成に取り掛かった。編集会議を行い、統一的な方針を固めて、遺物の実測・トレース、仮版組を行い、原稿や遺物観察表等の作成を行い、報告書の刊行および収納を実施した。

第6表 2020年度整理等作業工程

作業内容		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	備考
遺構	図面編集													
	トレース													
	作表													
	版組													
遺物	遺物選別													
	実測・トレース													
	作表													
	版組													
写真	写真撮影													
	版組													
記録	原稿執筆													
	入稿・校正													
印刷・発送														
収納														

### 3 普及公開活動

『年報』36（2020年3月23日刊行）にて概要を掲載した。

### 4 作業日誌抄

#### 2019年度

4月25日	調査区・駐車場用地地権者へのあいさつ	7月3日	SB02埋甕検出
5月7日	県教委より「埋蔵文化財の発掘調査について」通知	7月10日	長野県文化財保護審議会委員現地指導
5月10日	プレハブ・トイレ設置及び仮設電気設備工事	7月18日	重機による埋戻し開始
5月13日	現地打合せ	7月19日	作業員雇用終了
5月16日	仮設水道及び安全対策（安全柵）仮設工事	7月23日	現場記録作業終了
5月20日	作業員雇用開始、重機による表土掘削開始 発掘器材搬入	7月23日	仮設電気設備撤去工事
5月22日	竪穴建物跡（SB01）検出	7月25日	発掘器材搬出、重機による埋戻し終了 仮設水道及び安全対策仮設撤去工事
5月27日	竪穴建物跡（SB02）検出	7月29日	引渡し事前現地打合せ
6月10日	SB01 炉跡検出	7月30日	プレハブ・トイレ撤去工事
6月19日	委託測量開始	7月31日	地権者立会いのもと引渡し 発掘作業終了

#### 2020年度

4月1日	本格整理作業開始	5月27日	拓本断面図作成
	図面・写真等記録・台帳の点検照合	6月1日	土器観察表作成
4月6日	遺物接合、図面整理	6月5日	土器復元・補強
4月15日	拓本個体選別、遺跡地図作成	7月14日	遺物実測図・トレース委託
4月22日	土器台帳作成	8月21日	編集会議
5月1日	基本土層図作成	9月9日	遺物実測図・トレース委託納品
5月7日	拓本作成	9月24日	遺物写真撮影委託開始
5月11日	石器分類、原稿執筆	9月30日	同 納品
5月18日	遺構図編集	10月21日	発掘調査報告書印刷・製本・発送業務契約
5月20日	石器注記	12月22日	発掘調査報告書刊行

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

羽場権現堂遺跡は天竜川右岸、飯田市市街地（飯田駅）から約2.5km西方にあり、長野県飯田市羽場区（大林1575-1ほか）に所在する（第1図）。飯田市は東を赤石山脈（南アルプス）と伊那山地、西を木曾山脈（中央アルプス）に挟まれた伊那谷の南端に位置し、谷の中央を天竜川が南流している。一帯は天竜川による河岸段丘が見られるとともに、断層地塊運動に伴う大規模な段丘崖の形成等が絡み合っただ複雑な段丘地形を呈している。なお、調査地周辺では市教委による発掘調査により、縄文時代晩期から弥生時代の間に大規模な洪水に見舞われた痕跡である広範囲の黄褐色砂が分布することが指摘されている。

遺跡範囲は東西650m、南北490mに広がり、風越山の南麓の松川左岸の河岸段丘上となる。遺跡の北には円悟沢川・熊の洞沢川が流れ、東では元山白山神社（権現堂）の段丘崖となる。現状は集落とリンゴなどの果樹園や野菜畑となっている。

### 第2節 歴史的環境

羽場権現堂遺跡の発掘現場では、縄文時代中期の遺構と遺物を発見した。本節では本遺跡が所在する飯田市羽場地区を含む旧飯田市内<sup>※1</sup>と周辺の上郷・鼎・伊賀良地区の遺跡を概観する。第2図の1が羽場権現堂遺跡である。

**旧石器時代** 飯田市では旧石器時代の遺跡としては、石子原遺跡・竹佐中原遺跡が確認されている。これ以外には断片的に遺物が出土している程度である。本地区周辺では飯田城城跡（32）で美術博物館建設に先立つ調査で黒曜石の細石刃核が見つかった。また、切石遺跡群（50）では古墳時代の住居跡から珪岩製のナイフ形石器が出土している。

**縄文時代** 早期では権現堂前遺跡（19）、正永寺原遺跡（22）、押洞遺跡（10）や松川対岸の立野遺跡（76）といった比較的標高の高い場所に立地している遺跡から押型文土器の破片が見つかった。また、羽場権現堂遺跡に隣接する大休遺跡（24）からは尖底土器が出土している。

前期では伊賀良地区で立野遺跡（76）、小垣外・辻垣外遺跡（86）などがある。中期になると、分布は広がりを見せ、正永寺原遺跡（22）、権現堂前遺跡（19）、押洞遺跡（10）、平沢遺跡（23）、東野宮の前遺跡（5）、飯田城下町遺跡（4）、箕瀬遺跡（3）、松川沿い鼎地区の切石遺跡群（50）や伊賀良地区の北方西の原遺跡（82）、北方大原遺跡（77）、三尋石遺跡（88）などがある。

後期では、権現堂前遺跡（19）で土器・石器・土偶・耳飾り等が出土している。大休遺跡（24）では配石遺構が調査された。松川対岸の酒屋前遺跡（90）では住居跡が確認されている。上郷地区では、日影林遺跡（39）、殿原遺跡（92）などがあげられる。

**弥生時代** 権現堂前遺跡（19）から前期の条痕文系土器が出土しているが、市内全域をみても前期の遺跡は少ない。後期になると遺跡数が多くなる。権現堂前遺跡（19）や竪穴住居跡・方形周溝墓が確認され方角東遺跡（17）、羽場曙遺跡（18）の他、正永寺原遺跡（22）、古屋垣外遺跡（12）、丸山遺跡（16）など

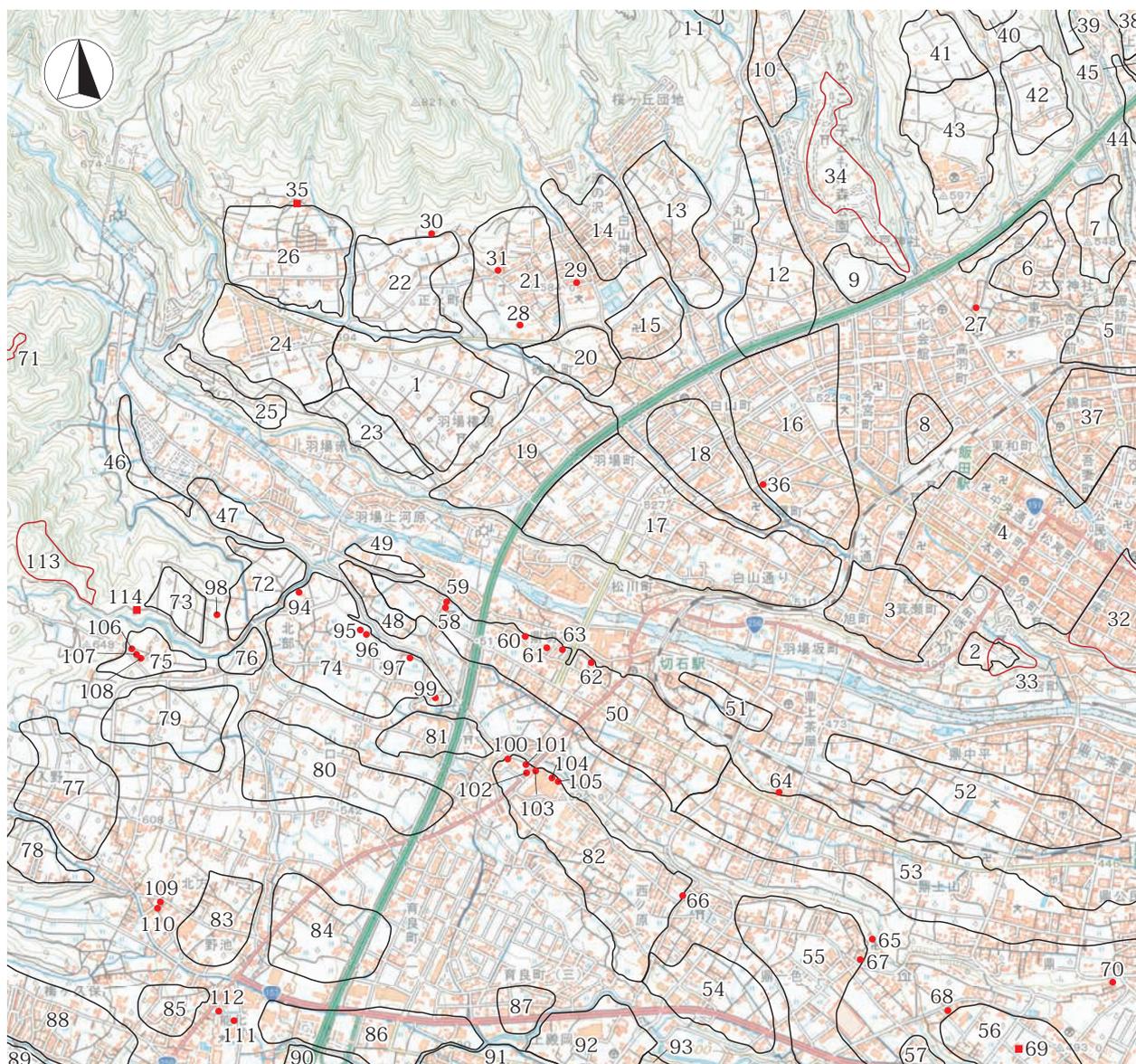
があり、飯田城下町遺跡（4）でも方形周溝墓が調査されている。縄文時代と比べて、遺跡の立地はやや標高的に下がった場所にある。

**古墳時代** 取り上げた遺跡の半数以上が円墳の古墳で、後世に削平を受けるなどした古墳も多くある。発掘調査がされた古墳は少なく、切石天伯1号・2号古墳（58・59）などがあげられる。集落跡としては切石遺跡群（50）や金谷遺跡（84）などで発掘調査がなされている。

**奈良・平安時代** 全体的に遺跡の分布が、松川周辺から鼎地区にかけてとなり、方角東遺跡（17）、切石遺跡群（50）、上山遺跡（53）などの集落がある。

**中世以降** 飯田城下町遺跡（4）、飯田城城跡（32）などの飯田城周辺の遺跡のほか、愛宕城城跡（33）、今宮城山城城跡（34）、田中居館跡（69）、切石城城跡（71）、桜山城城跡（113）などの居館・中世山城跡などがある。また、丸山遺跡（16）、方角東遺跡（17）、羽場曙遺跡（18）、切石遺跡群（50）、上山遺跡（53）など、調査がなされた遺跡や遺物の散布地も多い。

以上、図表には114遺跡を取り上げてあるが、その時代的内訳は旧石器時代1、縄文時代67、弥生時代42、古墳時代68、奈良・平安時代36、中世51、近世59各箇所となる。縄文時代以降、遺跡周辺一帯は、各時代を通じて、利活用された場所といえよう。



第2図 羽場権現堂遺跡周辺遺跡分布図

第7表 羽場権現堂遺跡周辺遺跡一覧

番号	市町村 番号	地区	遺跡名	旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈 良	平 安	中 世	近 世	種別	面積 (ha)	備考
1	137	旧市	羽場権現堂		○	○	○		○	○	○	散布地	18.7	
2	113	旧市	洞							○		散布地	1.8	
3	114	旧市	箕瀬		○	○			○	○	○	集落跡・その他の墓	9.7	一部発掘調査済
4	115	旧市	飯田城下町		○	○	○		○	○	○	集落跡・その他の墓	60.8	一部発掘調査済
5	118	旧市	東野宮の前		○				○	○	○	集落跡	9.8	一部発掘調査済
6	119	旧市	宮ノ上A		○		○			○	○	散布地	6.1	
7	120	旧市	宮ノ上B		○	○	○			○	○	散布地	5.3	
8	121	旧市	羽根垣外		○		○					散布地	3.0	
9	122	旧市	今宮		○		○	○		○	○	散布地	3.6	
10	123	旧市	押洞		○	○	○					その他の遺跡	6.5	
11	124	旧市	ヤソ屋敷		○		○					散布地	1.0	
12	125	旧市	古屋垣外		○	○				○	○	集落跡・その他の墓	14.9	一部発掘調査済
13	126	旧市	山の田		○		○			○	○	散布地	11.0	
14	127	旧市	滝の沢		○	○	○				○	散布地	7.4	
15	128	旧市	阿弥陀寺		○	○					○	散布地	5.6	
16	129	旧市	丸山		○	○	○		○	○	○	集落跡	25.7	一部発掘調査済
17	131	旧市	方角東		○	○	○		○	○	○	集落跡・その他の墓	34.0	一部発掘調査済
18	132	旧市	羽場曙		○	○	○			○	○	集落跡・その他の墓	10.6	一部発掘調査済
19	133	旧市	権現堂前		○	○	○		○	○	○	集落跡・その他の墓	17.3	一部発掘調査済
20	134	旧市	砂払		○	○	○		○	○	○	集落跡	5.0	一部発掘調査済
21	135	旧市	高越		○	○	○			○	○	散布地	14.7	
22	136	旧市	正永寺原		○					○	○	散布地	11.2	
23	138	旧市	平沢		○				○	○	○	散布地	5.8	
24	139	旧市	大休		○	○	○			○	○	集落跡	13.2	一部発掘調査済
25	140	旧市	大休下		○	○	○					集落跡・その他の遺跡	3.6	一部発掘調査済
26	141	旧市	羽場西の原		○	○	○			○	○	散布地	15.2	
27	662	旧市	高田古墳				○					円墳		削平
28	663	旧市	木戸脇古墳				○					円墳		削平
29	664	旧市	鐘鈴原古墳				○					円墳		削平
30	665	旧市	正永寺原1号古墳				○					円墳		削平
31	666	旧市	正永寺原2号古墳				○					円墳		削平
32	1080	旧市	飯田城城跡							○	○	城跡	21.0	一部発掘調査済
33	1081	旧市	愛宕城城跡							○		城跡	1.5	
34	1082	旧市	今宮城山城城跡							○		城跡	8.3	
35	1129	旧市	正永寺跡								○	寺跡		
36	1198	旧市	杵が塚								○	墓地		残存
37	1219	旧市	鈴加町		○	○				○	○	集落跡	12.7	一部発掘調査済
38	57	上郷	黒田八幡原		○				○		○	集落跡	8.2	一部発掘調査済
39	59	上郷	日影林		○				○	○	○	集落跡	3.0	一部発掘調査済
40	60	上郷	黒田柏原A		○	○			○	○	○	その他の遺跡	8.2	一部発掘調査済
41	61	上郷	黒田柏原B		○		○			○	○	散布地	6.3	
42	62	上郷・ 旧市	黒田柏原C		○				○	○	○	散布地	6.9	
43	63	上郷	黒田柏原D		○					○	○	散布地	12.7	一部発掘調査済
44	64	上郷	町張		○		○				○	散布地	5.3	
45	65	上郷	赤坂		○	○				○	○	散布地	14.7	一部発掘調査済
46	148	鼎	山の洞		○						○	散布地	2.9	
47	149	鼎	切石平林						○		○	散布地	3.3	
48	150	鼎	樋の沢		○						○	散布地	2.7	
49	151	鼎	桜瀬		○		○			○	○	散布地	1.4	
50	152	鼎	切石	○	○	○	○		○	○	○	集落跡・その他の墓	28.6	一部発掘調査済
51	153	鼎	上茶屋		○				○	○	○	散布地	2.6	
52	154	鼎	鼎中平		○		○		○	○	○	集落跡	16.6	一部発掘調査済
53	155	鼎	上山		○	○	○	○	○	○	○	集落跡	38.1	一部発掘調査済
54	157	鼎	田井座		○	○			○	○	○	集落跡・その他の墓	11.1	一部発掘調査済
55	158	鼎	一色		○	○			○	○	○	集落跡・その他の墓	21.0	一部発掘調査済
56	159	鼎	名古熊下		○				○	○	○	集落跡	18.1	一部発掘調査済
57	160	鼎	宮久保		○						○	散布地	6.7	
58	667	鼎	切石天伯1号古墳				○					円墳		発掘調査済、消滅
59	668	鼎	切石天伯2号古墳				○					円墳		発掘調査済、削平
60	669	鼎	桜瀬古墳				○					円墳		残存
61	670	鼎	切石大塚古墳				○					円墳		削平
62	671	鼎	切石古墳				○					円墳		削平
63	672	鼎	五輪原古墳				○					円墳		一部発掘調査済、削平

第2章 遺跡の位置と環境

番号	市町村 番号	地区	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	種別	面積 (ha)	備考
64	673	鼎	堀の内西古墳				◎					円墳		削平
65	675	鼎	萱垣古墳				◎					円墳		削平
66	676	鼎	宮の原古墳				◎					円墳		削平
67	677	鼎	西の原古墳				◎					円墳		削平
68	678	鼎	神明堂古墳				◎					円墳		削平
69	1084	鼎	田中居館跡							◎		居館跡		
70	1199	鼎	稲井大塚								◎	信仰壇		残存
71	1217	鼎	切石城城跡							◎		城跡	1.0	
72	244	伊賀良	真慶寺原		○				○			散布地	5.7	
73	245	伊賀良	真慶寺原上		○	○			○			散布地	3.3	
74	246	伊賀良	北方北の原		◎	○					○	その他の墓	18.8	一部発掘調査済
75	247	伊賀良	在京原		○	○					○	散布地	3.9	
76	248	伊賀良	立野		◎	○						集落跡	1.9	一部発掘調査済
77	249	伊賀良	北方大原		◎	◎	◎					集落跡	12.4	一部発掘調査済
78	250	伊賀良	河原林		◎	○						集落跡	4.4	一部発掘調査済
79	251	伊賀良	入野		◎	○					○	集落跡	10.5	一部発掘調査済
80	252	伊賀良	山口		○						○	散布地	17.1	
81	253	伊賀良	育良社付近		◎	◎	◎			◎	○	集落跡・その他の墓	5.1	一部発掘調査済
82	254	伊賀良	北方西の原		◎	◎	○	◎	◎	○	○	集落跡	21.8	一部発掘調査済
83	255	伊賀良	北方野池		○	○			○		○	散布地	7.2	
84	256	伊賀良	金谷		◎	◎	◎		◎	◎	○	集落跡	13.0	一部発掘調査済
85	258	伊賀良	文吾林		○						○	散布地	3.7	
86	259	伊賀良	小垣外・辻垣外		◎		◎		◎	◎		集落跡	12.7	一部発掘調査済
87	260	伊賀良	八幡面		◎	◎	◎		◎	◎		集落跡	2.8	一部発掘調査済
88	266	伊賀良	三尋石		◎	◎			○	○	○	集落跡	21.7	一部発掘調査済
89	267	伊賀良	三尋石南		○	○					○	散布地	17.9	
90	271	伊賀良	酒屋前		◎	◎	○		◎	◎	○	集落跡・その他の墓	9.6	一部発掘調査済
91	280	伊賀良	市場屋敷		○	○			○		○	散布地	15.7	
92	281	伊賀良	殿原		◎	◎	◎		◎	◎		集落跡	9.8	一部発掘調査済
93	282	伊賀良	円通寺北		○	○				◎	○	散布地	7.7	一部発掘調査済
94	891	伊賀良	北方北の原1号古墳				◎					円墳		削平
95	892	伊賀良	北方北の原2号古墳				◎					円墳		削平
96	893	伊賀良	北方北の原3号古墳				◎					円墳		削平
97	894	伊賀良	北方北の原4号古墳				◎					円墳		削平
98	895	伊賀良	真慶寺古墳				◎					円墳		削平
99	896	伊賀良	北の平古墳				◎					円墳		削平
100	897	伊賀良	笛吹1号古墳				◎					円墳		削平
101	898	伊賀良	笛吹2号古墳				◎					円墳		削平
102	899	伊賀良	笛吹3号古墳				◎					円墳		消滅
103	900	伊賀良	笛吹4号古墳				◎					円墳		削平
104	901	伊賀良	南方1号古墳				◎					円墳		削平
105	902	伊賀良	南方2号古墳				◎					円墳		削平
106	903	伊賀良	在京原1号古墳				◎					円墳		削平
107	904	伊賀良	在京原2号古墳				◎					円墳		削平
108	905	伊賀良	在京原3号古墳				◎					円墳		削平
109	907	伊賀良	北方二ツ塚1号古墳				◎					円墳		削平
110	908	伊賀良	北方二ツ塚2号古墳				◎					円墳		削平
111	909	伊賀良	文吾林1号古墳				◎					円墳		削平
112	910	伊賀良	文吾林2号古墳				◎					円墳		削平
113	1089	伊賀良	桜山城城跡							◎		城跡	3.9	
114	1134	伊賀良	観音堂跡								◎			

※1 『飯田市遺跡一覧表』（飯田市教委 2019）では地区にある旧市は、1937（昭和12）年に飯田町・上飯田町が合併して飯田市が発足した当初の橋北・橋南・羽場・丸山・東野の5地区のことである。

※2 表の時期区分で○は遺物確認、◎は遺構確認のことである。

## 第3章 調査の方法

### 第1節 発掘作業

調査は県教委の「記録保存を目的とする発掘調査の標準および積算基準」と、当センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に即して実施している。

#### 1 遺跡名称と遺跡記号

遺跡名称と遺跡記号は、羽場権現堂遺跡 (HABAGONGEN) : 「IHG」である。遺跡記号は、調査記録の便宜を図るため、遺跡名をアルファベット3文字で表したもので、1文字目の「I」は長野県内を10地区に区分し、下伊那郡、飯田市に付与した名称、2文字目と3文字目は遺跡名のローマ字表記2文字を選択したものである。各種記録類や遺物の注記に遺跡記号を用いた。

#### 2 遺構名称と遺構記号

遺構も遺跡記号と同様に、記録の便宜を図るため記号を用いた。遺構名称は調査時に決定するため、遺構の種類・性格に適合しない場合があるが、主に遺構の形状や特徴で区分した。遺構番号は、時代などに関わらず種類ごと、検出順に付けた。一旦記号・番号を付したものは原則として変更してない。調査の結果、遺構でないことが判明したものについては欠番とした。また、調査段階で遺構番号の付いていなかったものについては、整理段階で新たに付与した。今回の調査で用いた遺構記号には、以下の種類がある。

S B : 概ね一辺2 mを超える方形、長方形、円形、楕円形の掘込み

S K : 単独もしくは他の掘込みとの関係がないS Bよりも小さな掘込み

なお、S B内の柱穴・貯蔵穴などはピット（記述・図を問わず個別番号を付す場合「P」）を付した。

#### 3 調査区とグリッドの設定

国土地理院の平面直角座標第Ⅷ系の原点（X = 東経 138° 30' 00"、Y = 北緯 36° 00' 00"）を基点に、200 の倍数値を選んで測量基準線を設け、調査対象範囲全体をカバーするようにグリッドを設定した。

大々地区は、200 × 200 m の区画で、西から東へ I、II のローマ数字で表記した。大地区は、大々地区を 40 × 40 m の 25 区分に分割したもので、北西から南東へ A ~ Y のアルファベット番号を与えた。中地区は、大地区を 8 × 8 m の 25 区分に分割したもので、北西から南東へ 1 ~ 25 のアラビア数字を与えた。中区画を遺構測量等の基準・単位とした。なお、座標値は、世界測地系である。

また、調査対象地をほぼ中央から2区に分割し、便宜的に1、2区と呼称して調査を進めた。

#### 4 表土の掘削と遺構の検出

調査区内を重機により、地表から1.5 m前後の深さまで掘削し、人力による遺構検出を行った。検出面は1・2区ともに基本土層V層上面で、黄褐色土に黒褐色土等が落ち込む様子で確認した。出土遺物については、遺構が明確となった場所は、遺構ごとに取り上げ、その他は1、2区で一括して取りまとめた。

## 5 遺構の発掘と記録類の作成

竪穴建物跡の調査は、土層観察用ベルトに沿った先行トレンチで床面を確認するとともに、土層の堆積状況を把握・記録して、埋土を床面まで掘下げ、柱穴、炉などの建物内施設の精査・記録を行った。完掘状態の記録を行った後に床面下（掘方）の状況を確認した。土坑は、埋土を半裁し、土層の堆積状況を観察・記録した後に完掘した。図化記録では、遺構平面図は手測量し図面用紙に記録したものと、業者委託による単点測量を行い、提出された紙出力図に遺構と照合しながら結線を行ったものがある。土層断面図、遺物出土状況図は調査研究員および発掘作業員が手測量で行った。遺構図は縮尺1/20を基本とし、必要に応じて1/10で測量した。また、調査範囲図、地形図は業務委託で作成した。写真記録はフル一眼レフデジタルカメラを用いた。デジタル写真は、J P E GとL A W形式のデータを保存した。発掘作業では撮影記録簿にファイル番号、撮影内容等を記載した。

## 第2節 整理等作業

### 1 遺物と記録類の整理

遺物は取上げ単位ごとに台帳登録し、洗浄・クリーニングと注記を行い、材質別に土器・土製品、石器に大別して整理作業を進めた。

土器・土製品は接合を行いながら、観察と分類、破片数と重量の計測を進め、遺構・遺跡の時期や特徴を示すために報告書への掲載が必要な遺物を抽出し、必要に応じて補強と復元を行った。石器は観察・分類を行いつつ、大きさと重量の計測を行い、報告書掲載遺物を抽出した。抽出した遺物は管理番号を付して遺物管理台帳に登録し、観察表を作成した。

縄文土器は拓本をとり、トレースは埋文センターにおいて製図ペンを用いた手トレースを行った。土器・土製品、石器については業務委託による描画ソフトIllustratorを用いたデジタルトレースを実施した。手トレースした遺物図はデジタルスキャンし、デジタルトレースした遺物図と合わせて、Illustratorを用いてデジタル図版データを作成した。

遺構図面類は原図を台帳に登録するとともに、記載内容を点検・修正しながら整理し、竪穴建物跡など一部の個別図についてはトレースのための2次原図を作成した。修正図や2次原図をもとに、Illustratorを用いてデジタルトレースを行い、個別遺構図、基本土層図、遺構配置図（全体図）などのデジタル図版データを作成した。発掘作業で撮影したデジタル写真は、写真台帳を作成し、発掘年度、撮影日、撮影方向、内容を記載した。デジタル写真はJ P E GおよびL A Wデータを撮影順にハードディスクに記録した。遺物写真撮影は業務委託により実施した。撮影にはフル一眼レフデジタルカメラを使用した。

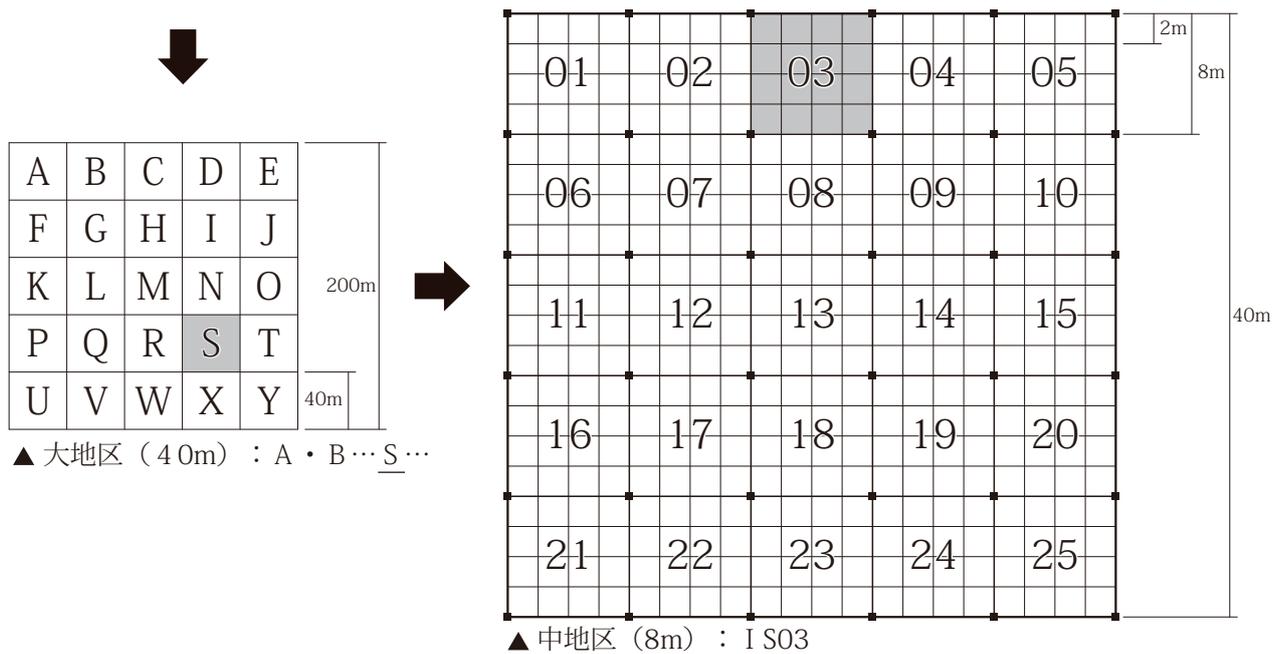
### 2 報告書作成と資料収納

報告書の本格的な編集作業は、令和2年度に入ってから着手した。報告書作成にあたり、2020年8月21日に編集会議を行った。会議で指摘を受けた事項について検討を行い、報告書の内容を整備した。

資料収納は、遺物の材質・種別ごとに報告書掲載遺物と非掲載遺物に分けたうえで、出土遺構・地区等の地点別にテンバコに収納するとともに、遺物収納台帳に登録した。実測図類は手実測遺構図・委託測量図、手実測遺物図、委託実測遺物図に通し番号（図面番号）を付けて図面収納台帳に登録し、図面ファイル等に収納した。埋文センターで作成した写真等のデジタルデータはハードディスクに記録した。業務委託によるデータは、収納時点ではC DないしD V Dに記録した。



▲ 大々地区 (200m) : I・II



第3図 調査区とグリッドの呼称

## 第4章 基本層序と遺構・遺物

### 第1節 基本層序

調査対象地の基本層序は以下のとおりとなる（第4図）。

I層：暗褐色（10YR3/3）シルト。粘性ややあり。しまりなし。小礫を少量混入。耕作土。

I a層：黒褐色（10YR2/3）シルト。粘性ややあり。I層よりしまりあり、小礫の混入が多い。耕作土。

II層：黒褐色（10YR2/2）シルト。粘性なし。しまりややあり。小礫（径2～8mm）をIII層より多く、白色粒子（径1～3mm）を少量混入。

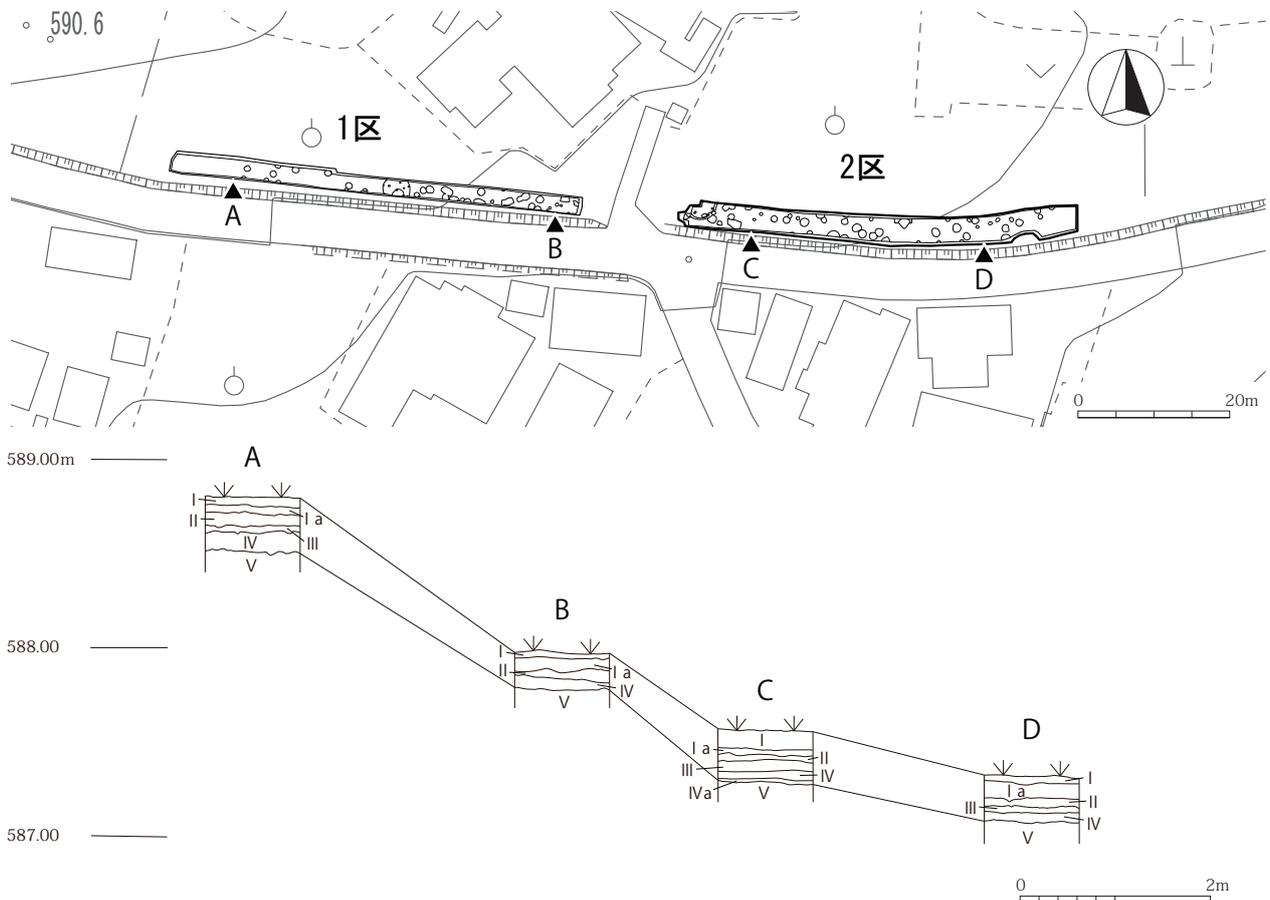
II a層：黒褐色（10YR2/3）シルト。粘性なし。しまりあり。II層より混入物の割合が多く、色調が暗い。

III層：褐色（10YR4/4）シルト。粘性なし。しまりあり。小礫（径2～10mm）をII層と同程度混入し、白色粒子（径1～3mm）を微量混入。（1区東側で層厚が薄く、東端部ではほとんど認めない）。

IV層：黒褐色（10YR2/2）シルト。粘性なし。しまりややあり。小礫（径2～10mm）・白色粒子（径1～3mm）をII層より多く混入する。遺物包含層。

IV a層：黒褐色（10YR3/2）シルト。粘性なし、しまりややあり。IV層より色調が明るい。小礫（径2～10mm）・白色粒子（径1～3mm）をII層より多く混入する。遺物包含層。

V層：黄褐色（10YR5/6）シルト。粘性なし、しまりややあり。遺構検出面。



第4図 基本土層図

調査では上記のように基本土層を把握した。Ⅰ層は耕作土である。Ⅲ層は市教委の周辺の本発掘・試掘・立会調査の結果から、縄文時代から弥生時代の間堆積した洪水砂（黄褐色砂・黄褐色砂質土）と推定する（飯田市教委 2003『羽場曙遺跡 方角東遺跡』）。Ⅳ層が遺物包含層で、Ⅴ層上面で遺構を検出した。

## 第2節 遺構

### 1 竪穴建物跡

本遺跡では竪穴建物跡（S B）が2軒検出された。縄文時代中期初頭～中葉1軒・中期後葉1軒である。調査区が東西に細長く、いずれも遺構の全容を調査できていない。

**S B 01**（遺構：第7図・PL 1、土器：第11図・PL 4、石器：第17～19図・PL 9）

**位置**：1区中央、ⅠS02・03グリッド。**検出**：黒褐色土を埋土とする落ち込みを検出した。北・南壁の一部は調査区外となる。**埋土**：レンズ状の堆積、壁際には壁面に沿って黒褐色土、暗褐色土が観察できた。**重複関係**：S K 01に切られるが、本跡の床面は残存する。**構造**：形状は、円形の平面形が想定される。規模は東西方向3.6m、南北方向（2.05）m、検出面からの深さ48cmを測る。床面は地山を利用し、硬い。壁はほぼ垂直で、北東側の一部に若干緩やかな箇所がある。柱穴はP 1、2、3、4を主柱穴と考えている。周溝は確認できなかった。**埋甕炉**：中期初頭～中葉の深鉢が埋設され、掘方が土器より1～2cm程大きい掘込みである。土器内や掘方内に焼土はみられず、土壌を洗浄し、炭化粒を若干得た。**出土遺物**：中期初頭の土器片を主体に、検出面から30～40cmの深さで出土した。やや大きめの破片もあり、1～2個体分の破片が投棄されたことも推測する。**時期**：出土土器から縄文時代中期初頭～中葉と推測する。

**S B 02**（遺構：第8図・PL 1・2、土器：第11・12図・PL 4・5、石器：第17～19図・PL 9）

**位置**：2区西、ⅠT02・03・07・08グリッド。**検出**：黒褐色土を埋土とする円形の落ち込みを検出した。西側はカクランにより壊され、北側は調査区外に及ぶ。**埋土**：しまりのある2層が本跡の東側にみられ、その上部に黒褐色土が堆積する。**重複関係**：S K 90、S K 61を切り、S K 91に切られる。**構造**：形状は、遺構の3分の2程度が調査区外となるが、径4～4.5mの円形と推測する。検出面からの深さは38cmを測る。床面はやや凹凸があり、貼床と推測する硬化面が部分的に観察でき、他は地山利用である。壁は床面からやや急角度で立ち上がる。壁際に周溝が部分的に認められたがP 2の方向に延びる部分は床面検出時に明瞭ではなく、旧建物跡に伴う周溝の可能性もある。**炉**：不明である。調査区外に存在すると推測している。**出土遺物**：埋甕を2基検出した。1基は南東壁寄り（埋甕1）（15）、1基は南壁寄り（埋甕2）（14）である。埋甕2は甕の口縁部が床面精査時に明確にできず、掘方調査時に検出でき、旧建物跡に伴う埋甕の可能性もある。**時期**：出土土器から縄文時代中期後葉と推測する。

### 2 土坑

土坑（S K）は基本層序Ⅴ層上面で黒褐色土の落ち込みとして、81基を検出した。ここでは、遺構の時期が特定できる遺物が出土した土坑、あるいは形状規模等で特徴を有する事例について記述し、その他は、観察表を参照されたい。主な時期は、出土土器から縄文時代中期初頭～中期後葉と推測した。

**S K 01**（遺構：第9図・PL 2、土器：第13図・PL 5、石器：第17・18図・PL 9）

**位置**：1区中央、ⅠS02・03グリッド。**検出**：S B 01埋土内で黒褐色土の円形の落ち込みを確認した。**重複関係**：S B 01を切る。**形状・規模**：長軸（91）cm、短軸160cm、深さ28cmを測り、円形を呈す

る。南側は調査区外におよぶ。遺物：縄文中期初頭の土器が5点と、打製石斧（7）・横刃形石器（22）・石鏃（3）、下呂石や黒曜石片が十数点出土した。時期：縄文時代中期初頭と推測する。

**S K 10**（遺構：第9図、土器：第13図・PL 6）

位置：1区東、I S10グリッド。形状・規模：長軸35cm、短軸27cm、深さ20cmを測り、楕円形を呈する。遺物：縄文時代中期初頭の土器（33）が出土した。時期：出土土器から縄文時代中期初頭と推測する。

**S K 13**（遺構：第9図・PL 2、石器：第17・18図・PL 9）

位置：1区東、I S05グリッド。形状・規模：長軸102cm、短軸92cm、深さ25cmを測り、円形を呈する。遺物：打製石斧（9・11）、横刃形石器（23）が出土した。時期：縄文時代と考える。

**S K 14**（遺構：第9図、土器：第13図・PL 6）

位置：1区東、I S10グリッド。重複関係：S K 15を切る。形状・規模：長軸97cm、短軸（53）cm、深さ46cmを測り、円形を呈する。遺物：縄文時代中期初頭～中葉の土器（34）が出土した。時期：縄文時代中期初頭～中葉と推測する。

**S K 15**（遺構：第9図・PL 2、土器：第13図・PL 6）

位置：1区東、I S05・10グリッド。重複関係：S K 14に切られる。新旧の判断は平面では困難で、断面観察により判断した。形状・規模：長軸（82）cm、短軸81cm、深さ27cmを測り、楕円形を呈する。遺物：底面付近から埋土中層で縄文時代中期初頭～中葉の半完形の深鉢（35）が出土した。時期：縄文時代中期初頭～中葉と推測する。

**S K 16・17**（遺構：第9図・PL 2、石器：第17図・PL 9）

位置：1区東、I S04・05グリッド。重複関係：S K 16・17の前後関係は不明。形状・規模：S K 16は長軸（72）cm、短軸65cm、深さ24cmを測り、楕円形を呈する。S K 17は長軸（108）cm、短軸94cm、深さ30cmを測り、円形を呈する。遺物：S K 17から打製石斧（10）が出土した。時期：不明である。

**S K 22**（遺構：第9図・PL 2、土器：第13図・PL 6）

位置：1区東、I S04グリッド。形状・規模：長軸（156）cm、短軸（85）cm、深さ33cmを測り、楕円形を呈する。遺物：縄文時代中期後葉の浅鉢（37）と敲石が出土した。時期：縄文時代中期後葉と推測する。

**S K 23・24**（遺構：第9図）

位置：1区東、I S04グリッド。重複関係：S K 23がS K 24を切る。形状・規模：S K 23は長軸98cm、短軸（48）cm、深さ27cmを測り、円形を呈する。S K 24は長軸（59）cm、短軸（44）cm、深さ15cmを測り、円形を呈する。遺物：なし。時期：不明である。

**S K 25**（遺構：第9図・PL 2、土器：第13図・PL 6）

位置：1区東、I S03グリッド。形状・規模：長軸120cm、短軸（64）cm、深さ30cmを測り、楕円形を呈する。南側は一部が調査区外におよぶ。遺物：縄文時代中期初頭の深鉢の半完形品（38）が出土した。時期：縄文時代中期初頭と推測する。

**S K 26**（遺構：第9図、土器：第13図・PL 6）

位置：1区東、I S03グリッド。重複関係：S K 27との前後関係は不明。形状・規模：長軸（76）cm、短軸86cm、深さ15cmを測り、楕円形を呈する。遺物：縄文時代中期初頭の土器片（39）と、打製石斧が出土した。時期：縄文時代中期初頭と推測する。

**S K 27**（遺構：第9図・PL 3）

位置：1区東、I S03グリッド。重複関係：S K 26との前後関係は不明。形状・規模：長軸158cm、短軸（92）cm、深さ54cmを測り、長楕円形を呈する。底面はほぼ平坦な面である。遺物：土器はないが、底面近くには自然礫が11点まとまって出土した。時期：不明である。

**S K 29・30**（遺構：第9図）

位置：1区中央、I S03グリッド。重複関係：S K 30がS K 29を切る。形状・規模：S K 29は長軸89cm、短軸81cm、深さ27cmを測り、円形を呈する。S K 30は長軸110cm、短軸97cm、深さ19cmを測り、不整形円形を呈する。遺物：なし。時期：不明である。

**S K 37**（遺構：第9図）

位置：1区西、I R05・S01グリッド。形状・規模：長軸76cm、短軸（38）cm、深さ11cmを測り、楕円形を呈する。遺物：なし。時期：不明である。

**S K 40**（遺構：第9図、土器：第13図・PL 6）

位置：1区西、I R05グリッド。形状・規模：長軸85cm、短軸76cm、深さ36cmを測り、円形を呈する。遺物：縄文時代中期初頭の土器（40～44）5点は、摩耗と剥離が著しいが東海系の北裏C式と考える。また、打製石斧、横刃形石器が出土した。時期：縄文時代中期初頭と推測する。

**S K 61**（遺構：第9図・PL 3、土器：第14図・PL 6・7、石器：第17・18図・PL 9）

位置：2区西、I T08グリッド。重複関係：S B 02に切られる。形状・規模：長軸（108）cm、短軸103cm、深さ31cmを測り、隅丸方形を呈する。遺物：縄文時代中期初頭～中葉の平出3A式（47～50）と集合沈線文系土器（45・46・51～53）と打製石斧（12・13）、横刃形石器（24）が出土した。時期：縄文時代中期初頭～中葉と推測する。

**S K 65**（遺構：第9図、土器：第14図・PL 7）

位置：2区西、I T08グリッド。形状・規模：長軸66cm、短軸52cm、16cmを測り、不整形を呈する。遺物：土製円盤（55）が1点出土した。時期：縄文時代中期と推測する。

**S K 68**（遺構：第9図）

位置：2区西、I T08グリッド。形状・規模：長軸83cm、短軸（74）cm、深さ31cmを測り、円形を呈する。遺物：なし。時期：不明である。

**S K 70**（遺構：第9図、土器：第14図・PL 7）

位置：2区西、I T08グリッド。形状・規模：長軸（94）cm、短軸（56）cm、深さ31cmを測り、北側は調査区外におよぶ。残存部で楕円形を呈する。遺物：爪形文の施された縄文時代中期初頭の東海系土器（56）が出土した。時期：縄文時代中期初頭と推測する。

**S K 75**（遺構：第9図・PL 3、土器：第14図・PL 7、石器：第19図・PL 9）

位置：2区西、I T09グリッド。形状・規模：長軸84cm、短軸83cm、深さ58cmを測り、円形を呈する。遺物：縄文時代中期初頭～中葉の土器（57～59）が3点と、石錘（28）が1点出土した。時期：縄文時代中期初頭～中葉と推測する。

**S K 76・77**（遺構：第9図）

位置：2区西、I T09グリッド。重複関係：S K 76がS K 77を切る。形状・規模：S K 76は長軸91cm、短軸84cm、深さ27cmを測り、円形を呈する。S K 77は長軸（58）cm、短軸52cm、深さ15cmを測り、円形を呈する。遺物：S K 77から縄文地文の土器が2点と台石が出土した。時期：出土した土器は縄文時代中期と推測するが、小片のため両遺構の時期は不明である。

**S K 86・87**（遺構：第10図）

位置：2区中央、I T10グリッド。重複関係：調査範囲内では単独である。形状・規模：S K 86は長軸（41）cm、短軸110cm、深さ28cmを測り、円形を呈する。S K 87は長軸168cm、短軸（78）cm、深さ（164）cmを測り、円形を呈し、すり鉢状に深くなる。遺物：なし。時期：不明である。

**S K 90**（遺構：第10図・PL 3、土器：第15図・PL 7）

位置：2区西、I T07 グリッド。重複関係：S B 02 に切られる。形状・規模：長軸（83）cm、短軸（39）cm、深さ18cmを測り、円形を呈する。遺物：平出3A式土器（60・61）が2点出土した。時期：出土土器から縄文時代中期初頭～中葉と推測する。

S K 91（遺構：第10図・PL 3、土器：第15図・PL 7）

位置：2区西、I T08 グリッド。重複関係：S B 02 を切る。形状・規模：長軸（42）cm、短軸（29）cm、深さ32cmを測り、円形を呈する。遺物：半完形の土器（62）を1点と底部付近から破損した石皿が1点出土した。時期：縄文時代中期後葉と推測する。

S K 92・93（遺構：第10図、土器：第15図・PL 7）

位置：2区中央、I T10 グリッド。重複関係：単独。形状・規模：S K 92は長軸104cm、短軸104cm、深さ28cmを測り、円形を呈する。S K 93は長軸122cm、短軸100cm、深さ25cmを測り、楕円形を呈する。遺物：S K 93から、浅鉢（64）と外来系と考える深鉢片（63）が出土した。時期：S K 92は不明、S K 93が縄文時代中期初頭と推測する。

S K 96（遺構：第10図、土器：第15図・PL 7）

位置：2区中央、I T10・II P06 グリッド。形状・規模：長軸111cm、短軸（64）cm、深さ4cmを測り、南側は調査区外におよぶ。残存部は楕円形を呈する。遺物：土器（65）1点と打製石斧3点・横刃形石器1点が出土した。時期：縄文時代中期初頭と推測する。

S K 97・98（遺構：第10図・PL 3、土器：第15図・PL 7、石器：第19図・PL 9）

位置：2区中央、I T10 グリッド。重複関係：S K 98がS K 97を切る。形状・規模：S K 97は長軸108cm、短軸105cm、深さ22cmを測り、円形を呈する。S K 98は長軸100cm、短軸98cm、深さ23cmを測り、円形を呈する。遺物：S K 98から、細隆線文（66）と他系統と推測する土器片（67）と石皿（35）、下呂石剥片が出土した。時期：S K 97は不明、S K 98が縄文時代中期中葉末と推測する。

S K 106（遺構：第10図、土器：第15図・PL 8）

位置：2区東、II P07 グリッド。形状・規模：長軸96cm、短軸77cm、深さ69cmを測り、不整円形を呈する。遺物：土器（68）が1点と横刃形石器が出土した。時期：縄文時代中期後葉と推測する。

S K 109（遺構：第10図、土器：第15図・PL 8）

位置：2区東、II P07 グリッド。形状・規模：長軸62cm、短軸38cm、深さ52cmを測り、長楕円形を呈する。遺物：土製円盤（69）1点が出土した。時期：縄文時代中期と推測する。

S K 116（遺構：第10図、土器：第15図・PL 8）

位置：2区東、II P08 グリッド。形状・規模：長軸62cm、短軸54cm、深さ26cmを測り、円形を呈する。遺物：土器片（70）1点が出土した。時期：縄文時代中期初頭と推測する。

S K 117（遺構：第10図・PL 3、土器：第15図・PL 8、石器：第17図・PL 9）

位置：2区東、II P07・08 グリッド。形状・規模：長軸93cm、短軸89cm、深さ36cmを測り、不整円形を呈する。遺物：土器（71）1点と石鏃未成品（4）1点が出土した。時期：縄文時代中期初頭と推測する。

S K 118（遺構：第10図・PL 3、石器：第18・19図・PL 9）

位置：2区東、II P08 グリッド。形状・規模：長軸94cm、短軸88cm、深さ53cmを測り、不整円形を呈する。遺物：石錘（30）、打製石斧（14）、磨製石斧（16）、横刃形石器（26）が出土した。時期：縄文時代中期と推測する。

S K 121（遺構：第10図、土器：第15図・PL 8）

位置：2区東、II P08 グリッド。形状・規模：長軸78cm、短軸30cm、深さ68cmを測り、北側は調査区外におよぶ。残存部では円形を呈する。遺物：縄文時代中期初頭の土器（72～75）が4点出土した。時

期：縄文時代中期初頭と推測する。

### 第3節 遺物

出土遺物は、S B 01 が縄文時代中期初頭～中葉、S B 02 が縄文時代中期後葉の所産である。土器の総量は図化したものは89点、石器38点、縄文時代以外の遺物は出土していない。

#### 1 土器・土製品（第11～16図、PL 4～8）

土器の器形は深鉢が主体を占め、浅鉢が3点、壺1点、土製円盤3点が出土した。時代区分は、以下のとおりである。

中期初頭：五領ヶ台式土器、平出3A式土器、外来系の船元式土器、北裏C式土器

中期中葉：平出3A式土器、貉沢式土器、新道式土器

中期後葉：下伊那唐草文土器Ⅲ

1区ではS B 01を中心に中期初頭・中葉の土器が多く出土し、2区ではS B 02を中心に中期後葉の土器が出土している。土器の時期区分については（宮崎・綿田2013）に準拠した。

#### S B 01（第11図、PL 4）

1は埋甕炉で、床面の中央から出土している。上部には半裁竹管による連続刺突のある横位の半隆起線と横位の平行沈線（1条）、胴部では4単位の環状貼付文と逆U字状隆帯・蛇行する隆帯がそれぞれ2単位交互に貼付られ、その隆帯の間に8単位の縦位平行沈線（2条）が施される。地文は無文である。2は浅鉢で、口縁部に三角状突起を有し、地文のR Lの縄文に横位平行沈線（1条）、胴部では横位平行沈線（1条）と縦位平行沈線（2条）が描かれる。3は波状口縁（4単位）で、口縁部には地文のR Lの縄文上に円形突起が施される。頸部にかけては縦位平行沈線文の後、横位平行沈線文が施され、胴上部には横位平行沈線文をU字状沈線により区画し、三叉部には刺突が施されている。胴下部では横位平行沈線が縦位平行沈線で区画されている。中期初頭の集合沈線文系の系譜を引くものと考えられる。4は横位の結節のある隆帯が2本水平に施され、その間には斜行沈線が充填され、胴部では縦位の平行沈線がみられる。5は刻み目のある縦位の隆帯が1条、地文には綾杉文が充填される。6は口縁部には刺突が巡り、横位の隆帯と連続する爪型文のある縦位の隆帯で方形のモチーフが描かれ、その内部は平行の半隆起線と縦位の沈線が充填されており、縄文時代中期中葉3期（貉沢式）の特徴を備えている。7は口縁部に2条の連続する爪型文が刻まれた半隆起線文がみられる。8は連続する逆三角形の刺突が施された口縁部片。9は横位の連続する爪型文と横位の三角刺突文が施されている。10は2条の横位の半隆起線文と縦位の沈線が施され、地文はR Lの縄文、胴部には剥落した隆帯の痕跡が残っている。出土した土器は、縄文時代中期初頭～中葉の2・3期で、平出3A式が主体である。

#### S B 02（第11～12図、PL 4・5）

11は口縁部には円形の区画内に沈線文による唐草文が配され、胴部には沈線による逆U字状の区画が描かれ地文は綾杉状沈線である。12は口縁部に円形の区画で、区画内には縦位沈線が充填されている。胴部には縦位沈線（3条）と綾杉状沈線が施されている。13は壺型といえる器形で、口縁部は折り返され肥厚している。頸部には上下を沈線が施された波状の隆帯が巡り、胴部はR Lの縄文を地文とし、単沈線による渦巻き状の模様が描かれている。14は埋甕2で、検出時に床面が土器の上を覆っていたことから、15の埋甕が埋設される前の旧埋甕と判断した。土器は口縁部に縄文の充填された円形の区画（10単位）、

胴部にはR Lの縄文が地文として3条の縦位沈線が描かれる。15は埋甕1で、床面調査時に検出したことから本跡に伴う埋甕と判断した。口縁部(無文)直下に横位隆帯と連続する刺突(2列)、胴部には縄文のR L地文に縦位隆帯区画(6区画)と胴部中位には横位隆帯により上下に区画され、区画内には縦位蛇行沈線と綾杉状の沈線が施される。16は円形の区画内に円形の刺突、胴部には綾杉文の充填された逆U字状の区画がみられる。17は縦位の沈線が充填された円形区画の施された土器である。18は2条の垂下する沈線で、地文には細い沈線による綾杉文が施される。19は波状口縁で環状の突起を有し、地文にR Lの縄文が施され、その下部には横位の平行沈線と逆U字状の沈線がみられる。20は口縁部には縦位の沈線が描かれた円形区画、胴部には縦位の沈線と綾杉文がみられる。21は隆帯による渦巻き文と斜行沈線が施される。22は縦位の3条の沈線に地文は綾杉文が描かれている。23は口唇部には沈線、口縁部には円形刺突が施された円形区画、胴部には縦位の沈線とR Lの縄文が地文として施されている。24は沈線が充填された円形区画文。25は縦位の撚糸文が地文として施されている。26は三角形の区画内に連続する押し引きの刺突文がみられる。27は斜行する沈線が充填された楕円形の区画文。19は2・3期の平出3A式、26は3・4期の貉沢・新道式並行である。両者は混入したものと考えられる。ほかの土器については縄文時代中期後葉の12・13期に比定される。

**SK 01** (第13図、PL 5)

28は口唇部に三角形の連続する刺突、また口縁部には連続する爪型文が施された横位の半隆起線文2条がみられる。29は口唇部に連続する爪型文、その直下には横位の結節沈線が巡り、さらに胴部には斜行する沈線が施される。30は口唇部に三角状突起を有し、その下部には縦位の隆帯文が残る。胴部には縦位の平行沈線が施される。31は口唇部に刺突、その下部には横位の沈線と三角印刻文がみられる。32は地文にL Rの縄文が施され、その上に円形の刺突がみられる。SK 01の時期は出土した土器から縄文時代中期初頭に比定される。

**SK 10** (第13図、PL 6)

33は平行沈線、斜行沈線が充填され、さらに逆U字状の沈線が施される。時期は縄文時代中期初頭1・2期と考えられる。

**SK 14** (第13図、PL 6)

34は波状の口縁部で、縦位の隆帯が4条と蛇行する沈線文がみられる地文には縄文が施される。また横位の蛇行する沈線が認められる。時期は縄文時代中期初頭～中葉の2・3期と考えられる。

**SK 15** (第13図、PL 6)

35は口縁部に4単位の円形突起を有し、突起からは連続刺突のある隆帯が垂下している。また、水平方向の連続刺突が口縁部には2列、頸部には1列施され、口縁部から頸部にかけて縦位平行沈線、胴部上部には横位平行沈線2条みられる。縄文時代中期初頭～中葉2・3期の平出3A式に比定される。36は横位の半隆起線文の上に連続する爪型文、また平行する半隆起線文が施される。縄文時代中期初頭の東海系である北裏C式の可能性がある。

**SK 22** (第13図、PL 6)

37は4単位の波状口縁を有する浅鉢で、波頂部を欠いている。口縁部には斜行する短沈線と横位の半隆起線文(2条)、波頂部下に横位半隆起線を充填した縦位方形区画が施される。胴部は無文。縄文時代中期後葉の12・13期と考えられる。

**SK 25** (第13図、PL 6)

38は上端部では爪形文を有する横位の半隆起線文が描かれ、頸部上部では横位平行沈線を弧状・L字状・逆L字状の沈線で区画し、頸部下部では押し引きのある横位平行沈線(1条)により斜行平行沈線の充

填、胴上部では、押し引きのある横位平行沈線（2条）で区画し、縦位の平行沈線上に横位沈線が描かれている。胴下部では横位平行沈線とU字状の平行沈線により抉状突起のある三叉文が施されている。いわゆる集合沈線文系で縄文時代中期初頭2期と考えられる。

**S K 26**（第13図、PL 6）

39は横位の結節沈線が施された半隆起線文で、その下部には横位の半隆起線文がみられる。時期は縄文時代中期初頭1・2期と考えられる。

**S K 40**（第13図、PL 6）

40は横位の連続する爪型文の施された半隆起線文で、地文は無文である。41～44は連続する爪型文が施された半隆起線文である。時期は縄文時代中期初頭の北裏C式と考えられる。

**S K 61**（第14図、PL 6・7）

45は短い縦位平行沈線を横位平行沈線で区画している。地文は無文である。46は横位の平行沈線をU字状の平行沈線で区画。地文はRLの縄文が施される。47は三角刺突のある突起が口唇部に貼り付けられ、地文にはRLの縄文が施される。また、2条の横位平行沈線と斜位の平行沈線がみられる。48と同一個体である。51は口縁部に突起のある集合沈線文系である。52・53は横位の半隆起線文と縦位短沈線が施されている。同一個体とみられる。54は47～50と同一時期の底部片であろう。時期は45・46・51～53が縄文時代中期初頭～中葉2・3期の集合沈線文系の系譜を引いた土器で、47～50は平出3A式と考えられる。

**S K 65**（第14図、PL 7）

55は沈線と地文にLRの縄文が残る土製円盤である。時期は縄文時代中期と推測する。

**S K 70**（第14図、PL 7）

56は口唇部直下には1条の横位沈線、また、連続する爪型文が施された横位の隆帯が2条、隆帯間は無文である。時期は縄文時代中期初頭の東海系北裏C式と考えられる。

**S K 75**（第14図、PL 7）

57は隆帯による円形区画と沈線による同心円状のモチーフが描かれる。58は縦位の沈線で、地文にLRの縄文が施されている。59は弧状の沈線文、連続する爪型文の施された半隆起線文と斜行沈線文がみられる。時期は縄文時代中期初頭～中葉2・3期であろうか。

**S K 90**（第15図、PL 7）

60は波状口縁（4単位）で波頂部に突起（縦3本、横1本を組み合わせた短隆帯）を貼り付け、口縁部では縦位沈線を横位沈線で区画し、頸部では横位平行沈線を縦位平行沈線とU字状沈線で区画している。61は波状口縁を呈し、横位の平行沈線上に弧状の貼り付け文とその下部には弧状の沈線大小2段が施され、大の方の沈線は縦位の沈線と重なっている。また、口縁部から頸部には縦位の平行沈線さらにその下部には横位平行沈線にU字状の平行沈線が描かれている。地文はRLの縄文である。遺構の時期は縄文時代中期初頭～中葉2・3期の平出3A式である。

**S K 91**（第15図、PL 7）

62は口縁部では縦位平行沈線と横位平行沈線が施され、頸部では横位平行沈線を縦位平行沈線とU字状沈線の組合せにより区画されている。地文はRLの縄文である。縄文時代中期後葉の12・13期である。

**S K 93**（第15図、PL 7）

63は半隆起線文で地文にはLRの縄文が施され、縦位の平行沈線がみられる。胎土は灰白色を呈していることから在地産ではなく、縄文時代中期初頭の東海系土器の可能性が高い。64は浅鉢の口縁部片で、結節沈線と横位沈線がみられ、その下部には三角印刻文が施されている。縄文時代中期初頭1・2期の所

産と考えられる。

**S K 96** (第15図、PL 7)

65は口縁部に縦位沈線のある環状突起が貼り付けられ、横位の半隆起線文、縦位沈線が施されている。時期は縄文時代中期初頭の1期に位置づけられる。

**S K 98** (第15図、PL 7)

66は縦位とV字状の細隆起線文土器で、縄文時代中期中葉末の9期の所産。67は三角状突起、縦位の結節隆帯、その下部には横位の交互刺突文、菱形に区画されたと考えられる弧状の平行沈線が施されており、縄文時代中期初頭2期に位置づけられる。66の摩耗が著しいことから、混入したものと思われる。

**S K 106** (第15図、PL 8)

68は縦位の半隆起線文による区画と結節回転文が施される。遺構の時期は縄文時代中期後葉12・13期の親田式と考えられる。

**S K 109** (第15図、PL 8)

69は無文の土製円盤で、時期は縄文時代中期と推測する。

**S K 116** (第15図、PL 8)

70は口縁部に横位半隆起線文、胴部には縦位の半隆起線文が施されている。遺構の時期は縄文時代中期初頭2期に比定される。

**S K 117** (第15図、PL 8)

71は口唇部に結節沈線、その下部には平行結節状沈線文が施されている。遺構の時期は縄文時代中期初頭1期に比定される。

**S K 121** (第15図、PL 8)

72は4角形あるいは5角形の多角形の張り出しを持つ底部片で、地文にはLの縄文が斜位に施されている。遺構の時期は縄文時代中期初頭で、近畿・中四国系の船元式に比定される。73は平行沈線を用いて口唇部に横位半隆起線文、その下部に斜位半隆起線文と鋸歯状の半隆起線文、胴部との境には横位の半隆起線文と縦位の平行沈線が描かれている口縁部片である。74は平行沈線が斜格子状に施され、さらに下部には縦位の平行沈線がみられる。75は縦位沈線、横位の半隆起線文、胴部には縦位の沈線と横位の沈線が描かれる。遺構の時期は73~75の土器から縄文時代中期初頭1期と考えられる。

**遺構外遺物** (第16図、PL 8)

76・77は縦位の平行沈線と横位の2条の平行沈線が施される。78・79は縦位の平行沈線と横位の2条の平行沈線、横位の蛇行する沈線が認められる。76・77とは接合しないが、同一個体の可能性が考えられる。時期は縄文時代中期初頭~中葉2・3期の平出3A式。

80は隆帯による楕円区画が描かれ、隆帯の脇にはD字状の工具により連続する押引き文が施されている。遺物の時期は、縄文時代中期中葉3・4期。81は沈線による楕円区画が施され、区画の内外には横位の沈線が描かれる。遺物の時期は縄文時代中期後葉12・13期と考えられる。82は無文の円形区画が施された口縁部片で、縄文時代中期後葉12・13期が考えられる。83は縦位の結節縄文が施された縄文時代中期後葉12・13期の親田式と考えられる。84は縦位の2条の沈線によって区画され、区画内は綾杉文が施された胴部片。遺物の時期は縄文時代中期後葉12・13期と考えられる。85~87は接合関係はないが、同一個体と考えられる。口縁部は折り返しを持つ深鉢である。地文にはRLの縄文が施される。遺物の時期は縄文時代中期前半と考えられる。88は横位の半隆起線と半隆起線による円形区画が施され、地文にRLの縄文が施されている。遺物の時期は縄文時代中期初頭~中葉2・3期。89は地文にRLの結節縄文が施された土製円盤で、遺物の時期は縄文時代中期と推測される。

## 2 石器 (第17~19図、PL 9)

調査で得られた石器・石片類は黒曜石チップ類5点を除いて238点である。このうち器種分類した石器は164点で、出土地点別数量としては1区70点・2区94点、遺構内117点・遺構外47点が出土した。石器の遺構別出土量は、S B 01 (23点)、S B 02 (33点)と竪穴建物跡からの出土量が多い。土坑ではS K 118 (7点)で最も多く出土している。遺構内出土が多いことから、石器の属する時期は検出遺構に基本的に変わらない時期と考えている。

出土石器の器種組成は第8表のとおりである。打製石斧が48点と最も多く、次に横刃形石器33点で、出土石器の約半数を占める。一方、石鏃は4点、石鏃未成品が4点と少ない。石錘は6点出土した。全体的にみて、採集具が多く、狩猟具が少なく、漁猟具も持っていた生活のあり様が窺える。なお、器種分類は飯田市川路大明神原遺跡(埋文センター2010)に準拠した。石器図版は、器種ごとに選別して38点を図化した。なお、個別の計測値等の観察結果は「石器観察表」に示し、添付DVDに収録した。

### (1) 石鏃、石鏃未成品、石匙 (第17図、PL 9)

石鏃4点、石鏃未成品4点、石匙2点が出土した。1~3はいずれも欠損品で無茎の石鏃である。4は未成品で整形途中で欠損が生じたと推測するが、先端部を錐として利用した可能性もある。5は石匙で、横形で両面からの加工により、つまみ部を作出している。石材は1・2が黒曜石、3~5が下呂石である。

### (2) 打製石斧 (第17・18図、PL 9)

48点出土した。このうち欠損品は39点で、欠損部位が刃部および下半部となるものが27点を数え、7割となる。欠損品が多く確定的でないが、いわゆる撥型・分銅型はみられず短冊型が主である。石材は緑色岩が27点と半数を占め、次いで堅砂岩・硬砂岩が17点である。このうち素材が緑色岩の場合、摩耗痕や潰れ痕が多々観察できた。掲載資料の石材は11の硬砂岩以外、緑色岩である。

### (3) 磨製石斧 (第18図、PL 9)

6点出土した。15は縦に半割した欠損品で、敲石に転用されている。16は基部欠損した石斧を全体的に再加工して利用している。石材は15が緑色岩、16が硬砂岩である。

### (4) 横刃形石器 (第18図、PL 9)

33点出土した。扁平な剥片の縁辺を利用した石器で、大半が背面に自然面を残す。石材は堅砂岩・硬砂岩が3分の2を占め、次いで緑色岩が8点である。出土量の多い打製石斧と石材を比較した場合、石材選択が異なる。打製石斧では緑色岩、横刃形石器が砂岩系の利用が高い。17は縦長の剥片であるが、縁辺を刃部として利用する点で横刃形石器として扱った。21・24は一部に摩耗痕跡がある。掲載資料の石材は21・25の緑色石以外、硬砂岩である。

### (5) 石錘 (第19図、PL 9)

6点出土した。楕円礫の両端に敲打による抉入部がある。石材は28が片麻岩以外、硬砂岩である。

### (6) 敲石・磨石・凹石 (第19図、PL 9)

敲石8点、磨石2点、凹石1点が出土した。素材となる円形・楕円形・棒状の礫に敲打痕・磨面・凹痕がある。33・34は礫全体に各痕跡が認められた。石材は31が花崗岩、32が砂岩以外、緑色岩である。

### (7) 石皿、台石 (第19図、PL 9)

石皿4点、台石2点が出土した。大型扁平礫の表面に使用痕跡となる摩耗痕、敲打痕が観察できたものである。36は使用による窪みが見られた。石材は35~38の全てが花崗岩である。

第8表 石器器種組成表

	石錘	石錐	石匙	石皿	削器	原石	石核	石鏃	石鏃未成品	台石	打製石斧	敲石	二次加工剥片	微細剝離剥片	凹石	磨製石斧	磨石	両極石器	横刃形石器	計
SB01	1	-	-	-	-	-	1	1	-	-	6	-	4	-	-	1	-	1	8	23
SB02	2	-	-	-	1	-	1	1	2	2	6	5	-	-	1	-	1	2	9	33
SK	3	1	-	2	1	3	2	1	1	-	19	2	1	10	-	1	-	2	12	61
遺構外1区	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	6	-	-	3	-	3	-	1	2	17
遺構外2区	-	-	1	2	1	-	3	1	1	-	11	1	-	3	-	1	1	2	2	28
合計	6	1	2	4	4	3	7	4	4	2	48	8	5	16	1	6	2	8	33	164

第9表 土器観察表

図版	遺物番号	PL	写真番号	管理番号	出土位置	時期(縄文)	色調		胎土		文様・特徴	備考
							外面	内面	長石	雲母		
11	1	4	1	1	SB01床	中期初頭~中葉	2.5Y7/3	2.5Y6/3	中	微	横位半隆起線文(連続刺突)→横位平行沈線→環状隆帯(4単位)+連続刺突のある逆U字状隆帯・蛇行隆帯(各2単位)貼付→隆帯モチーフ間を縦位平行沈線で区画(8区画)	3期
11	2	4	2	2	SB01下層、No.1	中期初頭~中葉	7.5YR6/6	5YR5/6	中	微	三角状突起 口縁部:地文(RL)の上に横位平行沈線(1条) 胴部:地文(RL)の上に横位平行沈線(1条)+突起の下に縦位平行沈線(2条)	2・3期
11	3	4	3	3	SB01下層	中期初頭~中葉	2.5Y6/3	2.5Y5/2	多	微	波状口縁(4単位)地文(RL)→円形突起→縦位平行沈線文→横位平行沈線文→横位平行沈線文→U字状沈線区画+三叉部に刺突→横位平行沈線→縦位平行沈線	2・3期 集合沈線文系
11	4	4	4	16	SB01	中期初頭~中葉	10YR6/3	10YR7/3	多	微	横位平行沈線→横位隆帯(結節沈線)→斜走沈線→横位隆帯(結節沈線)→横位平行沈線→縦位平行沈線	2・3期
11	5	4	5	17	SB01	中期初頭~中葉	10YR6/3	10YR5/2	多	微	縦位隆帯(結節沈線)+綾杉文(斜走平行沈線)	2・3期
11	6	4	6	18	SB01	中期中葉	7.5YR5/3	7.5YR4/3	中	-	刺突→横位隆帯(半裁竹管内など)+縦位隆帯(半裁竹管連続刺突)→横位半隆起線文→縦位半隆起線文	3期(猪沢式)
11	7	4	7	19	SB01	中期初頭	5YR3/1	5YR4/1	中	微	横位半隆起線文(連続爪形文)2条	2期
11	8	4	8	20	SB01	中期初頭	10YR8/6	10YR7/6	多	微	横位連続爪形文→横位三角刺突文	2期 北裏C式?
11	9	4	9	21	SB01	中期初頭~中葉	2.5YR2/2	5YR5/4	中	微	沈線(縦+横+斜め)、地文(RL)	2・3期
11	10	4	10	22	SB01下層	中期初頭~中葉	2.5YR2/2	5YR6/4	多	中	縦位平行沈線→横位沈線→隆帯(剥落)→地文(RL)	2・3期
11	11	4	11	4	SB02 No.4~8・15・18、壁	中期後葉	2.5Y4/2	2.5Y5/2	多	中	円形沈線区画文(残存:7単位)+唐草文(沈線) 綾杉状沈線→逆U字沈線区画	12・13期
11	12	4	12	5	SB02床	中期後葉	2.5Y6/4	10YR6/8	多	中	円形沈線区画文(9単位)+縦位沈線 綾杉状沈線→縦位沈線(3条)	12・13期
12	13	4	13	6	SB02 No.21	中期後葉	7.5YR6/3	10YR6/3	多	中	折返し口縁 地文(RL)→波状隆帯→隆帯上下に沈線→単沈線による渦巻文	12・13期
12	14	5	14	7	SB02	中期後葉	2.5Y7/3	2.5Y7/3	多	微	円形沈線区画(10単位)+地文(RL) 地文(RL)→縦位沈線(3条)	12・13期
12	15	5	15	8	SB02	中期後葉	2.5Y6/4	2.5Y6/4	中	中	口縁部(無文)直下に横位隆帯→刺突(2列)→地文(RL)→縦位隆帯区画(6区画) 胴部中に横位隆帯→縦位蛇行沈線→綾杉状沈線	12・13期
12	16	5	16	23	SB02 No.9	中期後葉	7.5YR5/2	10YR5/2	中	微	円形区画文(円形刺突充填)→沈線区画(綾杉文)	12・13期
12	17	5	17	24	SB02 No.11・14・17	中期後葉	5YR3/1	7.5YR5/4	中	微	円形区画文(縦位沈線)	12・13期
12	18	5	18	26	SB02 No.16	中期後葉	10YR6/2	10YR6/3	少	-	沈線区画(綾杉文)	12・13期
12	19	5	19	27	SB02	中期初頭~中葉	5YR3/1	10YR6/2	少	-	波状口縁 地紋(RL横位)→環状突起(貼付)→横位平行沈線+縦位平行沈線	2・3期 平出3A式
12	20	5	20	28	SB02	中期後葉	7.5YR5/4	5YR5/4	微	-	隆帯横位楕円区画文(内部縦位沈線)→綾杉文+縦位沈線	12・13期
12	21	5	21	29	SB02	中期後葉	5YR5/4	7.5YR4/4	微	微	隆帯横位渦巻楕円文(内部斜走沈線)	12・13期
12	22	5	22	30	SB02	中期後葉	10YR6/3	10YR5/2	微	微	地文(綾杉文)+縦位沈線(3条)	12・13期

図版	遺物番号	P	L	写真番号	管理番号	出土位置	時期(縄文)	色調		胎土		文様・特徴	備考
								外面	内面	長石	雲母		
12	23	5	23	31	SB02	中期後葉	2.5YR5/6	2.5YR5/6	微	-	口唇部：沈線 口縁部：隆帯横位凹形区画文(凹形刺突) 胴部：地文(RL縦位施文)+縦位2条沈線(間すり消し)	12・13期	
12	24	5	24	32	SB02	中期後葉	10YR5/3	7.5YR4/1	少	少	横位凹形区画文(縦位沈線)	12・13期	
12	25	5	25	33	SB02	中期	10YR8/3	10YR6/3	微	少	地文(縦位縄文)	他系統 (東海系?)	
12	26	5	26	34	SB02	中期中葉	5YR3/2	7.5YR6/4	中	微	半隆起線三角区画(連続刺突文)	3・4期 谿沢・新道式 並行	
12	27	5	27	35	SB02	中期後葉	7.5YR4/4	5YR5/4	少	微	隆帯横位楕円区画文(内部斜走沈線)	12・13期	
13	28	5	28	36	SK01	中期中葉	10YR6/3	10YR7/2	少	-	三角状突起 刺突文→半隆起線→連続爪形文(2条)半隆起線	1・2期	
13	29	5	29	37	SK01	中期中葉	7.5YR6/3	7.5YR6/3	少	微	連続爪形文→結節沈線→斜走沈線	1・2期	
13	30	5	30	38	SK01	中期中葉	10YR6/3	10YR3/1	少	微	三角状突起 半隆起線→縦位平行沈線+縦位圧痕隆帯	1・2期	
13	31	5	31	40	SK01	中期中葉	5YR4/4	5YR5/4	少	-	口唇部：刺突 横位沈線→三角印刻	1・2期	
13	32	5	32	41	SK01	中期中葉	7.5YR7/4	7.5YR7/4	微	-	地文(LR)→凹形刺突文	1・2期	
13	33	6	33	45	SK10	中期中葉	10YR6/2	10YR6/2	少	-	平行沈線→凹形沈線(斜走沈線)	1・2期	
13	34	6	34	46	SK14	中期中葉～中葉	5YR5/4	7.5YR5/4	中	少	波状口縁 地文+隆帯5条(地文)→横位沈線(コンパス文)→無文帯→横位沈線	2・3期	
13	35	6	35	9	SK15	中期中葉～中葉	10YR6/4	10YR6/4	中	微	凹形突起(4単位)から縦位隆帯(連続刺突)垂下→口縁上端に水平連続刺突(2列)→横位隆帯(連続刺突)→縦位平行沈線→横位平行沈線	2・3期 平出3A式	
13	36	6	36	47	SK15 No.2	中期中葉	10YR7/3	10YR7/3	中	微	横位半隆起線(連続爪形文)→横位半隆起線	北裏C式	
13	37	6	37	10	SK22	中期後葉	10YR4/1	7.5YR6/4	中	微	波状口縁(4単位)斜行短沈線+横位半隆起線(2条)波長部下に横位半隆起線充填の縦位方形区画	12・13期	
13	38	6	38	11	SK25	中期中葉	2.5Y6/4	2.5Y6/4	微	-	横位半隆起線(爪形文)→横位平行沈線→L字・逆L字状沈線区画→横位押し引き沈線(1条)→斜行平行沈線→横位押し引き沈線(2条)→縦位平行沈線→横位沈線→U字状+横位平行沈線による三叉文部に刺突	2期 集合沈線文系	
13	39	6	39	49	SK26	中期中葉	10YR6/2	7.5YR6/4	微	-	横位半隆起線(結節沈線)→横位半隆起線(結節沈線)→横位半隆起線	1・2期	
13	40	6	40	50	SK40	中期中葉	7.5YR5/4	5YR6/3	微	微	横位半隆起線(連続爪形文)→無文	北裏C式	
13	41	6	41	51a	SK40	中期中葉	7.5YR5/3	10YR6/3	中	中	横位半隆起線2条(連続爪形文)→縦位半隆起線2条(連続爪形文)	北裏C式	
13	42	6	42	51b	SK40	中期中葉	7.5YR6/4	10YR6/3	少	微	横位半隆起線2条(連続爪形文)	北裏C式	
13	43	6	43	51c	SK40	中期中葉	7.5YR5/3	10YR6/3	中	少	横位半隆起線3条(連続爪形文)→無文	北裏C式	
13	44	6	44	51d	SK40	中期中葉	7.5YR6/4	10YR6/4	微	微	横位半隆起線1条(連続爪形文)→斜位半隆起線2条(連続爪形文)	北裏C式	
14	45	6	45	12	SK61	中期中葉～中葉	2.5YR4/4	5YR5/6	微	-	上部：横位半隆起線文→短い縦位平行沈線と横位平行沈線 胴部：無文	2・3期 集合沈線文系	
14	46	6	46	13	SK61 No.3	中期中葉～中葉	2.5YR4/6	5YR6/4	微	-	横位の平行沈線→U字状の平行沈線で区画 胴部：RLの地文	2・3期 集合沈線文系	
14	47	6	47	52	SK61 No.2	中期中葉～中葉	5YR2/2	5YR5/8	微	-	三角状突起 地文(RL)→突起貼付け→横位平行沈線(2条)→斜位平行沈線→横位平行沈線	No48と同一個体 平出3A式	
14	48	6	48	53	SK61 No.3	中期中葉～中葉	5YR5/6	2.5YR5/6	微	-	三角状突起 地文(RL)→突起貼付け→横位平行沈線(2条)→斜位平行沈線→横位平行沈線	No47と同一個体 平出3A式	
14	49	6	49	59	SK61	中期中葉～中葉	2.5YR3/1	5YR5/8	多	中	三角状突起 地文(RL)→平行沈線→突起貼付け→斜位平行沈線	平出3A式	
14	50	6	50	57	SK61 No.13	中期中葉～中葉	2.5YR3/1	7.5YR4/2	多	中	地文(RL)→横位半隆起線(2条)→斜走平行沈線→横位半隆起線	平出3A式	
14	51	6	51	58	SK61	中期中葉～中葉	5YR2/2	5YR6/6	中	中	口縁部に突起のある集合沈線文系土器 横位沈線→縦位沈線→横位沈線	2・3期 集合沈線文系	
14	52	7	52	55	SK61 No.7	中期中葉～中葉	5YR2/3	5YR5/6	多	少	横位半隆起線(5条)→縦位短沈線	2・3期 集合沈線文系、No53 と同一個体	
14	53	7	53	56	SK61 No.8	中期中葉～中葉	2.5YR3/4	2.5YR5/8	多	少	横位半隆起線→縦位短沈線+縦位平行沈線	2・3期 集合沈線文系、No52 と同一個体	
14	54	7	54	54	SK61	中期中葉～中葉	5YR5/6	5YR1.7/1	多	少	地文(RL)		

第4章 基本層序と遺構・遺物

図版	遺物番号	P	L	写真番号	管理番号	出土位置	時期(縄文)	色調		胎土		文様・特徴	備考
								外面	内面	長石	雲母		
14	55	7	55	60	SK65	中期	5YR4/2	5YR4/2	多	少	地文(LR)+沈線		
14	56	7	56	61	SK70	中期中頭	5YR7/4	7.5YR7/4	少	少	沈線→横位隆帯(連続爪形文)→無文→横位隆帯(連続爪形文)	北裏C式	
14	57	7	57	62	SK75	中期中頭~中葉	5YR4/3	10YR5/3	中	少	隆帯による円形区画(沈線による同心円)	2・3期	
14	58	7	58	63	SK75	中期中頭~中葉	7.5YR5/4	5YR4/1	少	少	地文(LR)+縦位沈線	2・3期	
14	59	7	59	64	SK75	中期中頭~中葉	5YR5/6	5YR3/1	中	少	弧状沈線→斜走平行沈線+半隆起線(連続爪形文)	2・3期	
15	60	7	60	14	SK90	中期中頭~中葉	10YR5/4	10YR5/4	少	微	波状口縁(4単位) 波頂部:突起貼り付け 縦位沈線→横位沈線(口唇部・頸部)→縦位平行沈線+U字状沈線	2・3期 平出3A式	
15	61	7	61	66	SK90	中期中頭~中葉	10YR6/3	10YR4/3	少	微	波状口縁 縦位平行沈線→横位平行沈線→逆U字状隆帯→逆U字状沈線(大小3段)→地文(RL)→横位平行沈線→U字状沈線区画	2・3期 平出3A式	
15	62	7	62	15	SK91	中期後葉	2.5Y6/4	2.5Y6/4	中	少	円形沈線区画+刺突→縦位沈線→地文(RL)	12・13期	
15	63	7	63	67	SK93	中期中頭	10YR8/1	10YR8/3	少	-	半隆起線→地文(LR)+縦位平行沈線	東海系	
15	64	7	64	68	SK93	中期中頭	7.5YR6/6	5YR5/6	少	-	結節沈線→横位沈線	1・2期	
15	65	7	65	69	SK96	中期中頭	5YR6/6	5YR6/4	少	微	環状突起(縦位沈線) 横位半隆起線→縦位沈線→横位半隆起線→縦位沈線	1期 五領ヶ台式	
15	66	7	66	70	SK98	中期中葉末	10YR6/3	10YR6/2	中	少	細隆線貼付(縦位+V字方向)	9期 細隆線文土器	
15	67	7	67	71	SK98	中期中頭	5YR6/4	5YR6/6	中	少	三角状突起+縦位結節隆帯 横位交互刺突(上下)→弧状の平行沈線(菱形区画)	2期	
15	68	8	68	72	SK106	中期後葉	7.5YR4/3	7.5YR5/4	中	少	縦位半隆起線による縦位の区画+区画内結節回転	12・13期 親田式	
15	69	8	69	73	SK109	中期	7.5YR6/3	7.5YR6/4	多	微	無文		
15	70	8	70	74	SK116	中期中頭	5YR4/3	5YR4/6	少	微	横位半隆起線→縦位半隆起線	2期	
15	71	8	71	75	SK117	中期中頭	7.5YR6/4	7.5YR4/3	少	微	結節沈線→横位沈線(工具による押し引き)	1期	
15	72	8	72	76	SK121	中期中頭	5YR6/6	2.5YR5/6	不明 鉾物含む		地文(L)+斜位刻、四角形の底部	近畿・関西系 船元式	
15	73	8	73	77	SK121	中期中頭	7.5YR4/4	10YR6/4	少	微	横位半隆起線→斜位半隆起線+鋸歯状半隆起線→横位半隆起線→斜位半隆起線	1期	
15	74	8	74	78	SK121	中期中頭	7.5YR5/4	10YR6/6	多	微	平行沈線による斜格子→縦位平行沈線	1期	
15	75	8	75	79	SK121	中期中頭	5YR4/6	5YR3/3	多	微	縦位沈線→横位半隆起線→縦位沈線→横位沈線	1期	
16	76	8	76	42a	1区検出	中期中頭~中葉	10YR7/3	10YR7/3	中	微	縦位平行沈線→横位平行沈線(2条)→縦位平行沈線	2・3期 平出3A式	
16	77	8	77	42b	1区検出	中期中頭~中葉	10YR6/3	10YR7/4	中	中	縦位平行沈線→横位平行沈線(3条)→縦位平行沈線	2・3期 平出3A式	
16	78	8	78	43a	1区検出	中期中頭~中葉	10YR4/1	10YR7/3	中	中	縦位平行沈線→横位蛇行沈線(2条)→横位半隆起線コンパス文	2・3期 平出3A式	
16	79	8	79	43b	1区検出	中期中頭~中葉	10YR4/1	10YR6/4	中	微	縦位平行沈線→横位平行沈線(2条)→縦位平行沈線	2・3期 平出3A式	
16	80	8	80	80	2区検出	中期中葉	7.5YR7/6	7.5YR5/3	多	-	隆帯による楕円区画(隆帯脇に連続D字状押文)	3・4期	
16	81	8	81	81	2区カク	中期後葉	7.5YR6/4	2.5YR5/6	中	少	沈線による楕円区画(区画内横位短沈線)	12・13期	
16	82	8	82	83	2区カク	中期後葉	10YR7/3	10YR5/3	少	微	沈線による円形区画	12・13期	
16	83	8	83	84	2区カク	中期後葉	10YR7/3	7.5YR5/4	多	微	結節縄文	12・13期 親田式	
16	84	8	84	85	2区表	中期後葉	5YR5/4	5YR4/3	多	少	縦位沈線による区画(区画内綾杉文)	12・13期	
16	85	8	85	86	2区検出	中期前半	7.5YR5/3	10YR6/2	多	少	折返し口縁 地文(RL)	2・3期? No86・87と同一個体	
16	86	8	86	87	2区Z	中期前半	7.5YR6/4	10YR7/3	多	少	地文(RL)	2・3期? No85・87と同一個体	
16	87	8	87	88	2区Z	中期前半	7.5YR6/4	7.5YR7/4	多	少	地文(RL)	2・3期? No85・86と同一個体	
16	88	8	88	89	1区Z	中期中頭~中葉	5YR3/3	7YR5/4	中	少	横位半隆起線→半隆起線円形区画を施文後、地文(RL)	2・3期	
16	89	8	89	90	1区Z	中期	5YR4/3	2.5YR3/2	多	中	地文(RL)の結節縄文		

※胎土 多量=多、中量=中、少量=少、微量=微

## 第5章 総括

羽場権現堂遺跡は日当たりのよい緩斜面にあり、その範囲は広く、調査区はその北端部にあたる。調査区は東西に細長く伸び、面積的にも限られた範囲であったが、縄文時代中期の集落跡を確認し、成果を上げることができた。

発見した2軒の竪穴建物跡は、いずれも調査区内で全容を調査していないが、出土した遺物から、時期を異にしてつくられていたことがわかった。とくに、中期初頭の竪穴建物跡の調査事例は市内で初見となった。一方、発見された土坑は出土遺物も少なく、帰属時期が明確でないものの、竪穴建物跡と同時期の所産と考えている。また、土坑の用途を確定するに至っていないが、形状から貯蔵的施設の可能性もある。

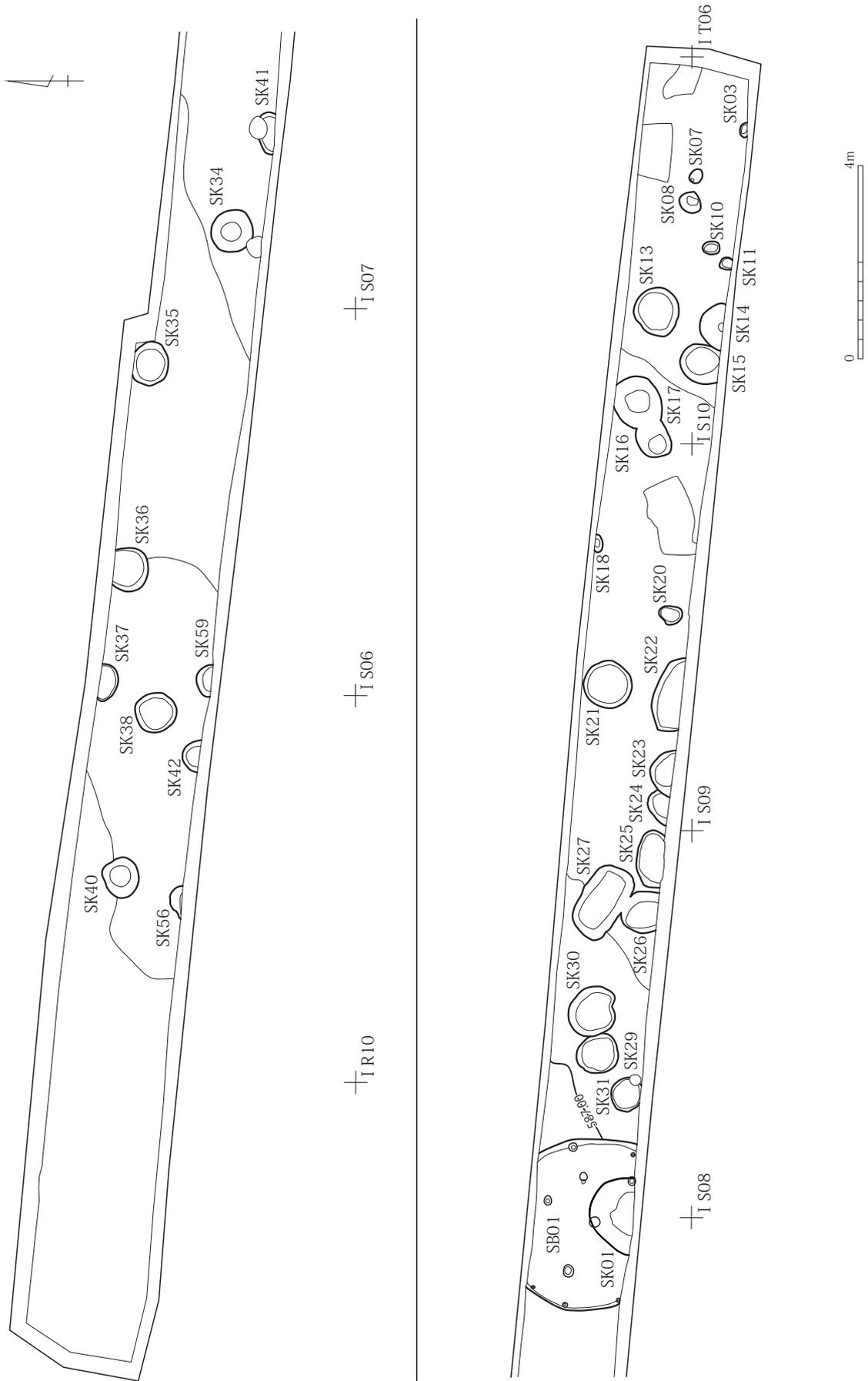
出土した縄文土器では、東海地方にみられる土器「北裏C式」、「船元式」との共伴事例などが提示できた。他地域との頻繁な交流があったことがうかがえる。石器は打製石斧、横刃形石器の出土数が多く、石材も選択されていることが指摘できた。土器・石器ともに、当地域の特徴と考えられる。

今回の調査は遺跡の一端を調査した結果であったが、当地における遺跡の様相を考えるうえで貴重な調査事例であったと考えている。今後、調査成果が活用されることを望みたい。

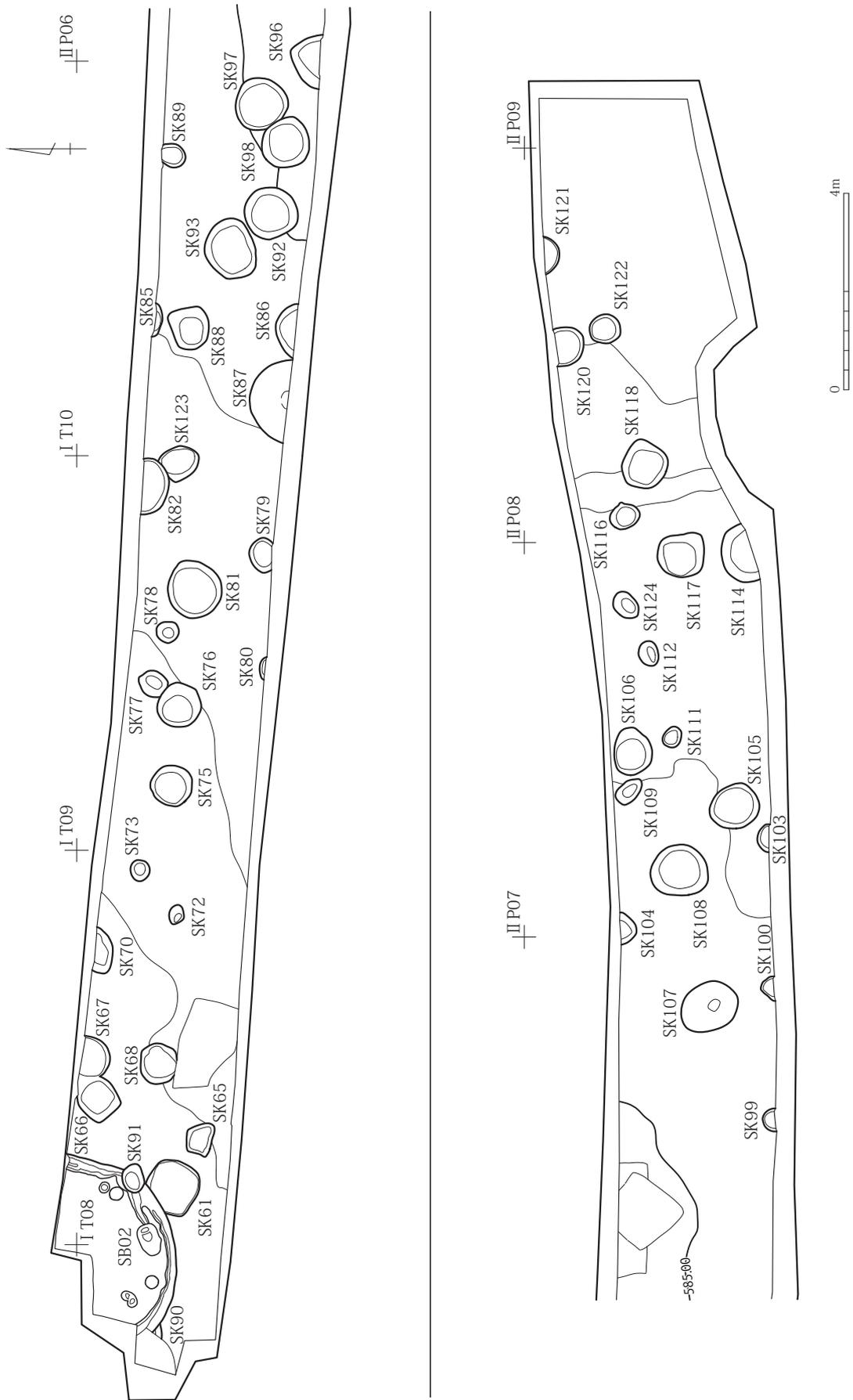
最後に、発掘調査に御協力いただいた関係者の皆さま、発掘作業から報告書作成までに貴重な御教示をいただいた多くの皆さまに、深甚なる謝意を申し上げます。

### 引用・参考文献

- 野村一寿 1988「縄文中期の土器」『長野県史 考古資料編 全一卷（四）遺構・遺物』
- 宮崎朝雄・綿田弘実 2013「長野県における縄文時代中期土器の編年と動態」『研究発表資料 文化の十字路信州』日本考古学協会  
2013年度長野大会実行委員会
- 守矢昌文 2013「諏訪地域における縄文時代中期の土器群構成とその分布」『研究発表資料 文化の十字路信州』日本考古学協会 2013  
年度長野大会実行委員会
- 坂井勇雄 2013「下伊那地域における縄文時代中期土器の様相」『研究発表資料 文化の十字路信州』日本考古学協会 2013年度長野大  
会実行委員会
- 綿田弘実 2013「長野県における縄文時代中期土器群の分布状況」『研究発表資料 文化の十字路信州』日本考古学協会 2013年度長野  
大会実行委員会
- 鵜飼幸雄 1977「平出第Ⅲ類A土器の編年的位置付けとその社会的背景」『信濃』29-4
- 林茂樹 1985「縄文中期土器『平出第Ⅲ類A』の系譜再論」『信濃』37-11
- 吉川金利 2003「下伊那縄文中期後葉に於ける土器様相と編年」『長野県考古学会誌』102
- 飯田市教育委員会 2003『城陸遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 2010『国道474号（飯橋道路）埋蔵文化財発掘調査報告書4 飯田市内その4 川路大明神原遺跡』
- 下伊那誌編纂会 1991『下伊那史 第一巻』
- 長野県飯田市教育委員会 1998『飯田の遺跡 市内遺跡詳細分布調査報告書』
- 長野県飯田市教育委員会 2003『羽場曙遺跡 方角東遺跡』
- 長野県飯田市教育委員会 2004『権現堂前遺跡』
- 長野県飯田市教育委員会 2008『羽場曙遺跡 方角東遺跡』
- 長野県飯田市教育委員会 2008『砂払遺跡』

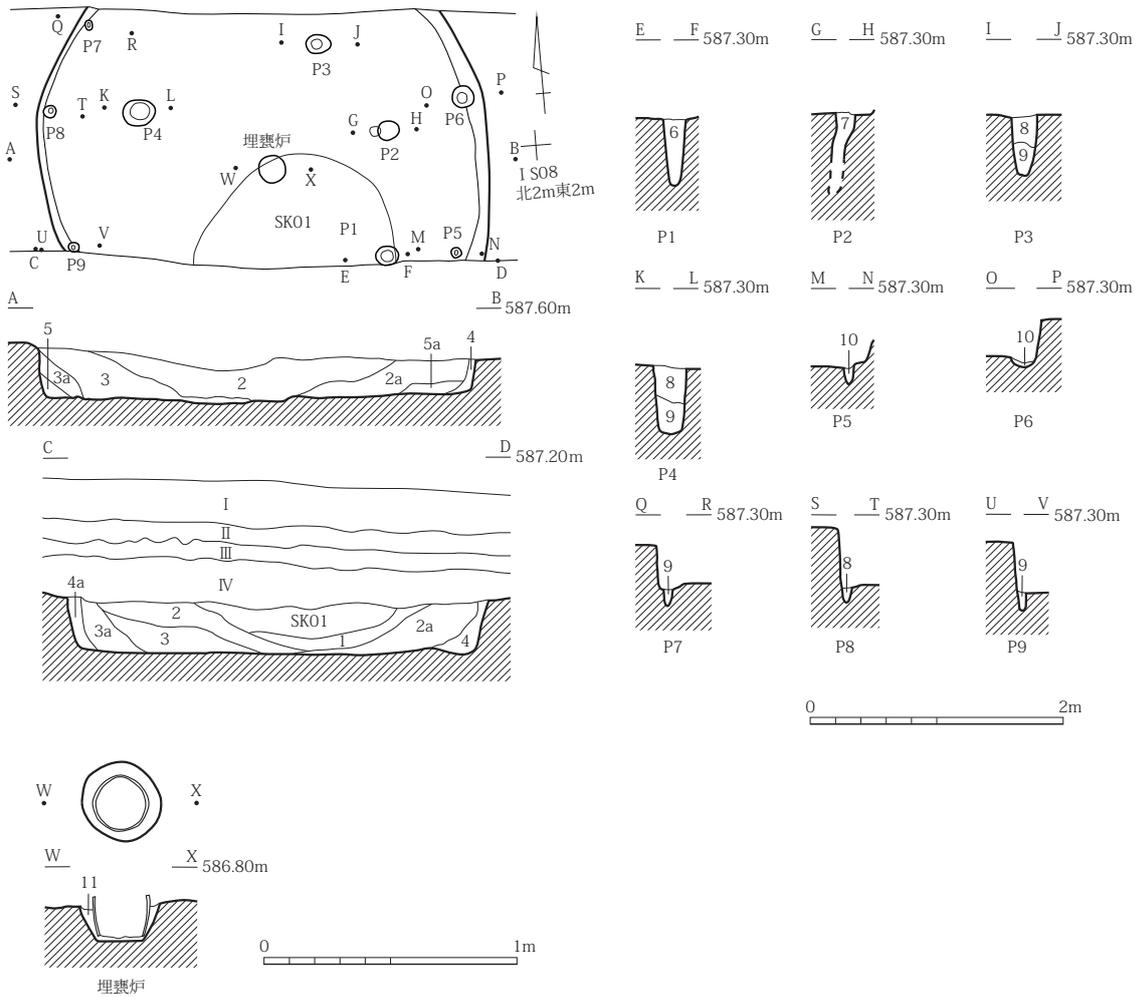


第5図 1区遺構配置図



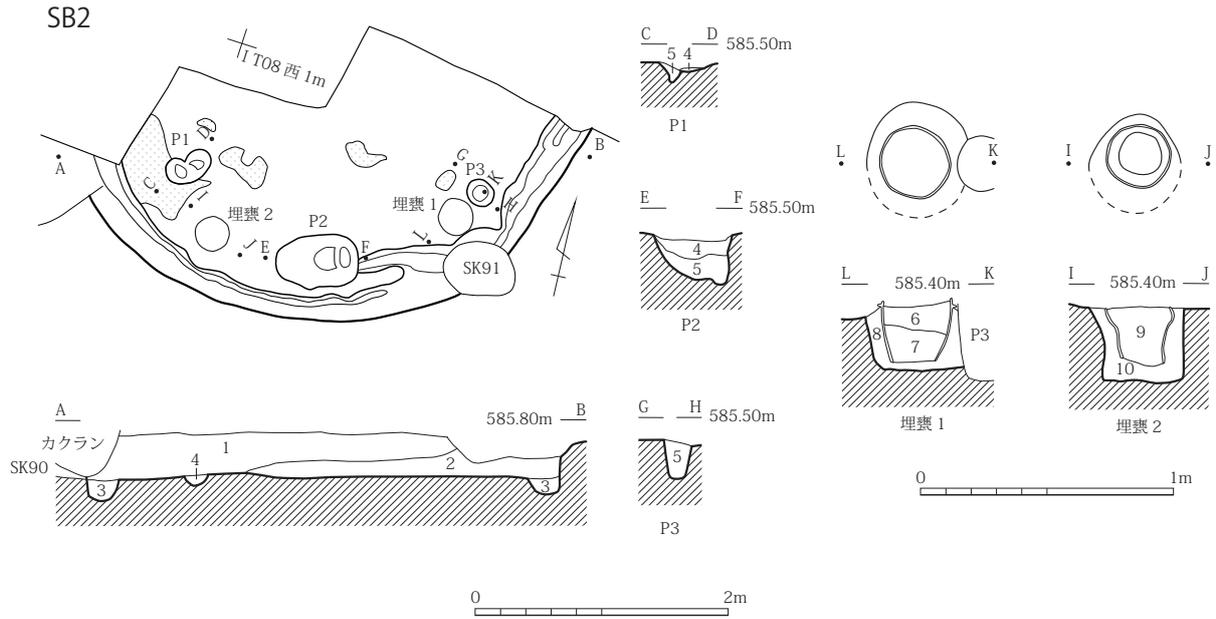
第6图 2区遺構配置図

SB1



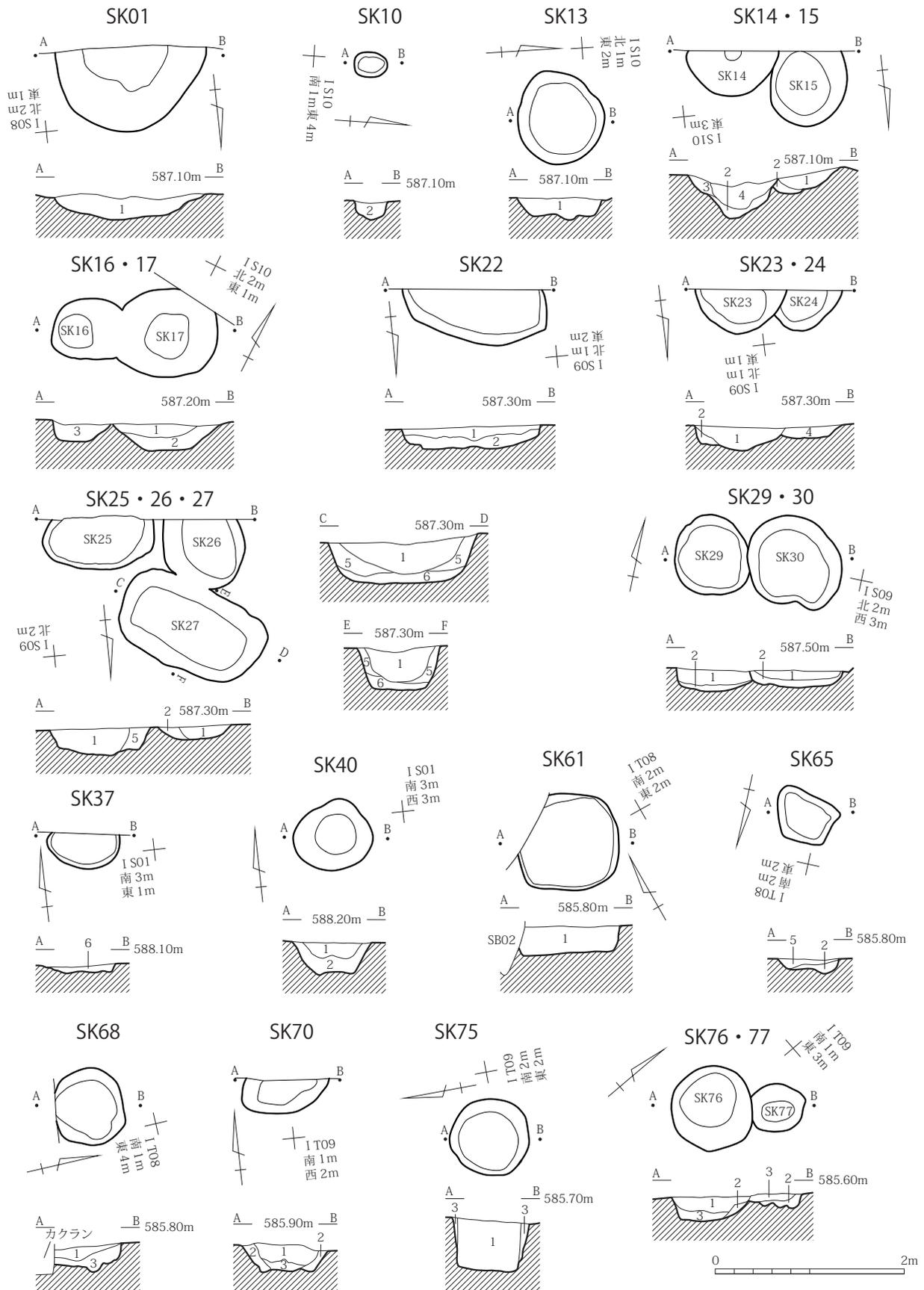
- |    |                   |   |
|----|-------------------|---|
| 1  | 黒褐色 (10YR2/2)     | シルト。粘性なし。しまりややあり。小礫 (径 1~7mm) を多量、白色粒子 (径 1~2mm) を少量混入              |
| 2  | 黒褐色 (10YR2/3)     | シルト。粘性なし。しまりややあり。小礫 (径 1~7mm) を多量混入 (1層より少ない)                       |
| 2a | 黒褐色 (10YR2/3)     | シルト。粘性なし。しまりややあり。混入礫が2層より大きい (径 1~10mm)                             |
| 3  | 暗褐色 (10YR3/3)     | シルト。粘性なし。しまりあり。小礫 (径 1~7mm)、白色粒子 (径 1~2mm) を混入                      |
| 3a | 暗褐色 (10YR3/3)     | シルト。粘性なし。しまりあり。3層より混入物の割合が多い  |
| 4  | 暗褐色 (10YR3/4)     | シルト。粘性なし。しまりやや強い。小礫 (径 1~7mm)、白色粒子 (径 1~2mm) を1~3層より少なく混入。黄褐色土粒子を混入 |
| 4a | 暗褐色 (10YR3/4)     | シルト。粘性なし。しまりやや強い。4層と比べ、黄褐色土を部分的にブロック状に混入                            |
| 5  | 黒褐色 (10YR2/2)     | シルト。粘性なし。しまりややあり。小礫 (径 1~7mm)、白色粒子 (径 1~2mm)、黄褐色土粒子を少量混入            |
| 5a | 黒褐色 (10YR2/2)     | シルト。粘性なし。しまりややあり。小礫 (径 1~7mm)、白色粒子 (径 1~2mm) が5層より多い                |
| 6  | 黒褐色 (10YR2/3)     | シルト。粘性なし。しまりあり。小礫 (径 1~10mm) を混入。黄褐色土粒子 (径 1~3mm) を若干混入             |
| 7  | 黒褐色 (10YR2/3)     | シルト。粘性なし。しまりなし。黄褐色土粒子を混入  |
| 8  | 黒褐色 (10YR2/3)     | シルト。粘性なし。しまりあり。小礫 (径 1~3mm)、白色粒子 (径 1~3mm) を少量混入                    |
| 9  | 黒褐色 (10YR2/3)     | シルト。粘性なし。しまりあり。小礫 (径 1~7mm)、白色粒子 (径 1~2mm)、黄褐色土ブロック混入               |
| 10 | 暗褐色 (10YR3/4)     | シルト。粘性なし。しまりややあり。小礫 (径 1~3mm) を少量、黄褐色粒子 (径 0.5~1mm) を多く混入           |
| 11 | にぶい黄褐色 (10YR10/4) | シルト。粘性ややあり。しまりややあり。白色粒子 (径 1~2mm) を少量、黄褐色粒子 (径 1~2mm) を多く混入         |

第7図 SB01 遺構図

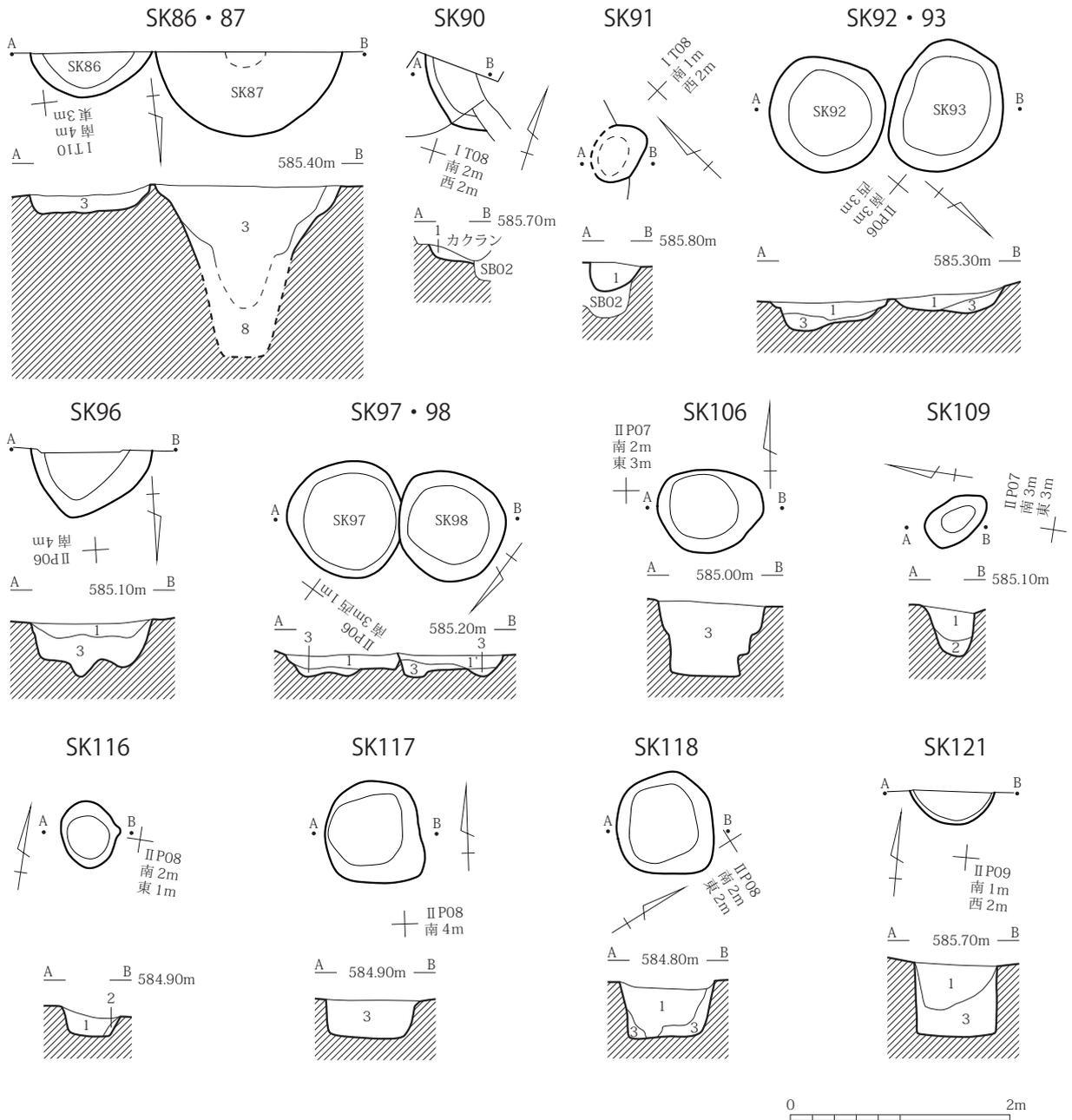


- |    |                |   |
|----|----------------|---|
| 1  | 黒褐色 (10YR2/2)  | シルト。粘性なし。しまりあり。SK90の埋土より暗く、小礫(径2~10mm)を多く、白色粒子(径1~2mm)を少量混入 |
| 2  | 黒褐色 (10YR2/3)  | シルト。粘性なし。しまりあり(1層より弱い)。小礫(径2~10mm)を混入。白色粒子(径1~2mm)を少量混入     |
| 3  | 黒褐色 (10YR3/3)  | シルト。地山の黄褐色土粒子(径1~3mm)を多く混入                                  |
| 4  | 黒褐色 (10YR2/3)  | シルト。粘性なし。しまりあり。小礫の混入は少ない。白色粒子(径1~2mm)を少量混入                  |
| 5  | 黒褐色 (10YR2/2)  | シルト。小礫(径2~10mm)を多く、白色粒子(径1~2mm)を少量混入。黄褐色土ブロック状に混入           |
| 6  | 黒褐色 (10YR2/3)  | シルト。粘性なし。しまり弱い。白色粒子(径1~2mm)を少量混入                            |
| 7  | 黒褐色 (10YR2/3)  | シルト。粘性なし。しまり弱い。小礫(径1~3mm)、白色粒子(径1~2mm)、黄褐色土を少量混入            |
| 8  | 明黄褐色 (10YR6/8) | シルト。粘性なし。しまりややあり  |
| 9  | 暗褐色 (10YR3/3)  | シルト。小礫(径2~5mm)、白色粒子(径1~2mm)を少量混入                            |
| 10 | 明黄褐色 (10YR6/8) | シルト。粘性なし。しまりややあり  |

第8図 SB02 遺構図



第9図 SK遺構図(1)



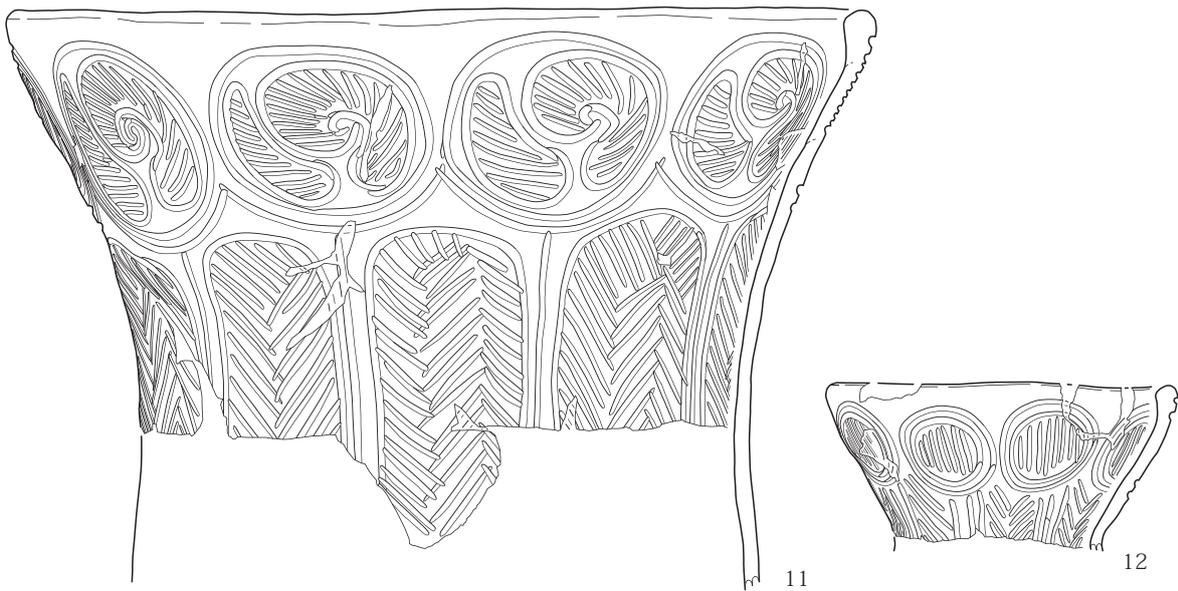
- |    |                         |  |
|----|-------------------------|--|
| 1  | 黒褐色 (10YR3/2)           | シルト。粘性なし。しまりややなし。小礫まじり                 |
| 1' | 黒褐色 (10YR3/2)           | シルト。粘性なし。しまりふつう。小礫まじり                  |
| 2  | にぶい黄褐色 (10YR4/3)        | シルト。粘性なし。しまりややなし。小礫まじり                 |
| 3  | 黒褐色 (10YR3/1)           | シルト。粘性なし。しまりややなし。小礫まじり。にぶい黄褐色土ブロック混入   |
| 4  | 黒褐色 (10YR3/2)           | シルト。粘性なし。しまりふつう。小礫まじり。にぶい黄褐色土粒子を混入     |
| 5  | 暗褐色 (10YR3/3)           | シルト。粘性なし。しまりなし。小礫まじり                   |
| 6  | 暗褐色 (10YR3/3)           | シルト。粘性なし。しまりふつう。小礫まじり。にぶい黄褐色土ブロック混入    |
| 7  | 黒褐色 (10YR2/3)           | シルト。粘性なし。しまりあり。小礫まじり                   |
| 8  | 黒褐色～暗褐色 (10YR3/2 ~ 4/3) | シルト。粘性なし。しまりふつう。小礫まじり。にぶい黄褐色土粒子・ブロック混入 |

第10図 SK遺構図(2)

SB01



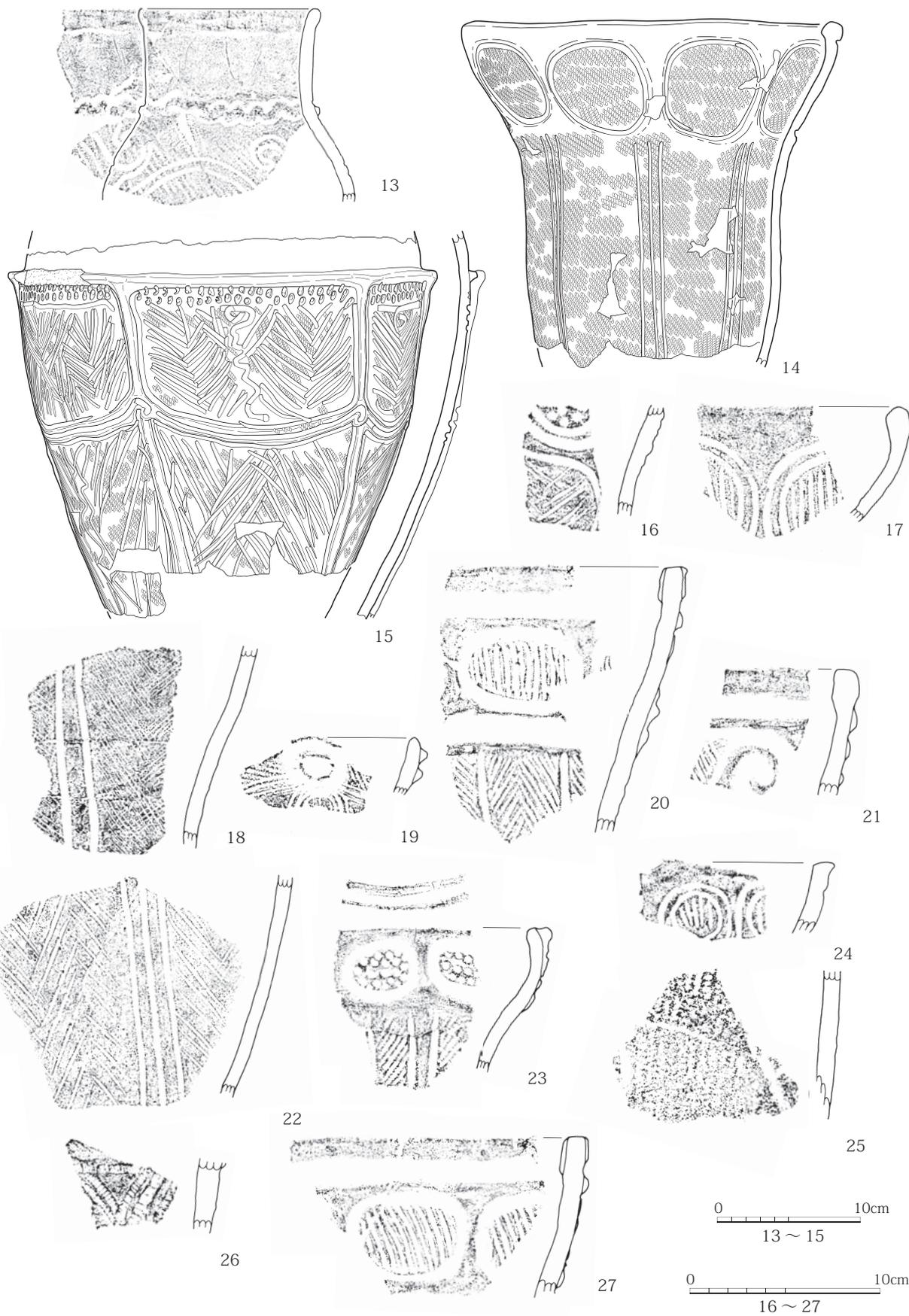
SB02



0 10cm  
1 ~ 3 • 11 • 12

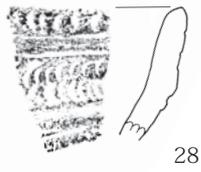
0 10cm  
4 ~ 10

第11図 出土土器 (1)

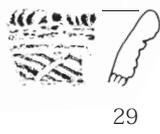


第12図 出土土器(2)

SK01



28



29



30

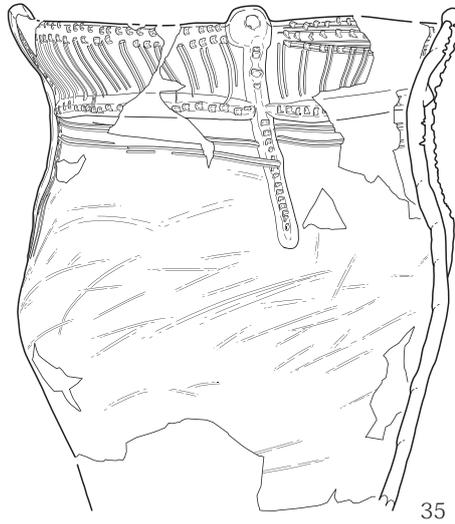


31



32

SK15



35

SK10

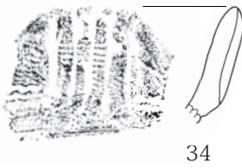


33



36

SK14



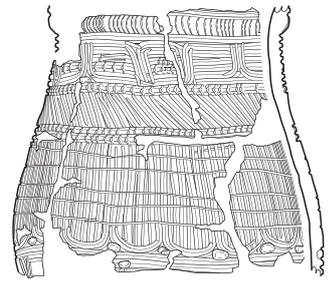
34

SK22



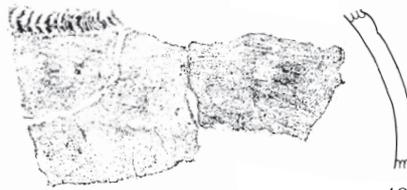
37

SK25



38

SK40



40

SK26



39



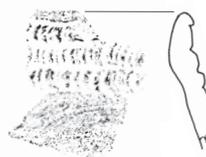
41

0 10cm  
35 · 37 · 38

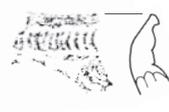
0 10cm  
28 ~ 34 · 36 · 39 ~ 44



42



43



44

第13図 出土土器 (3)

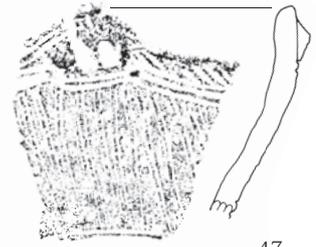
SK61



45



46



47



48



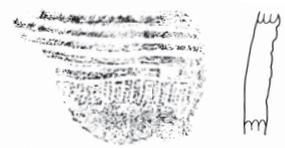
49



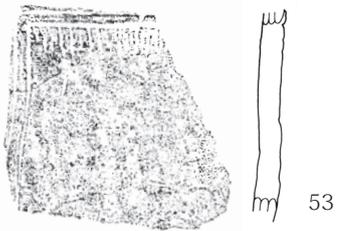
50



51



52



53



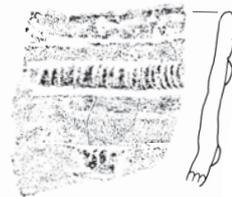
54

SK65



55

SK70

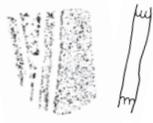


56

SK75



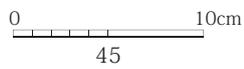
57



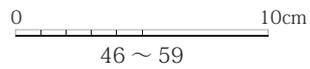
58



59

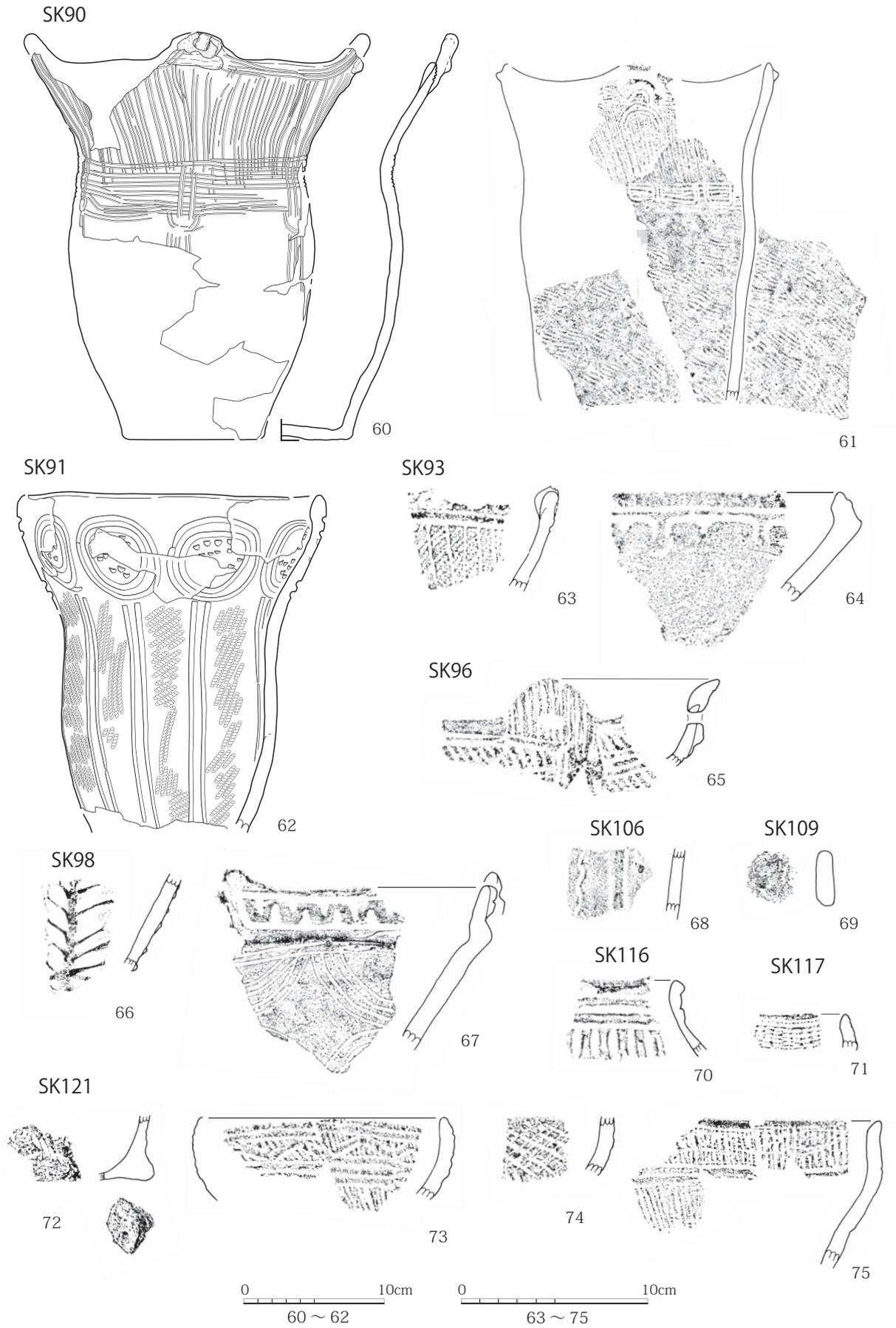


45



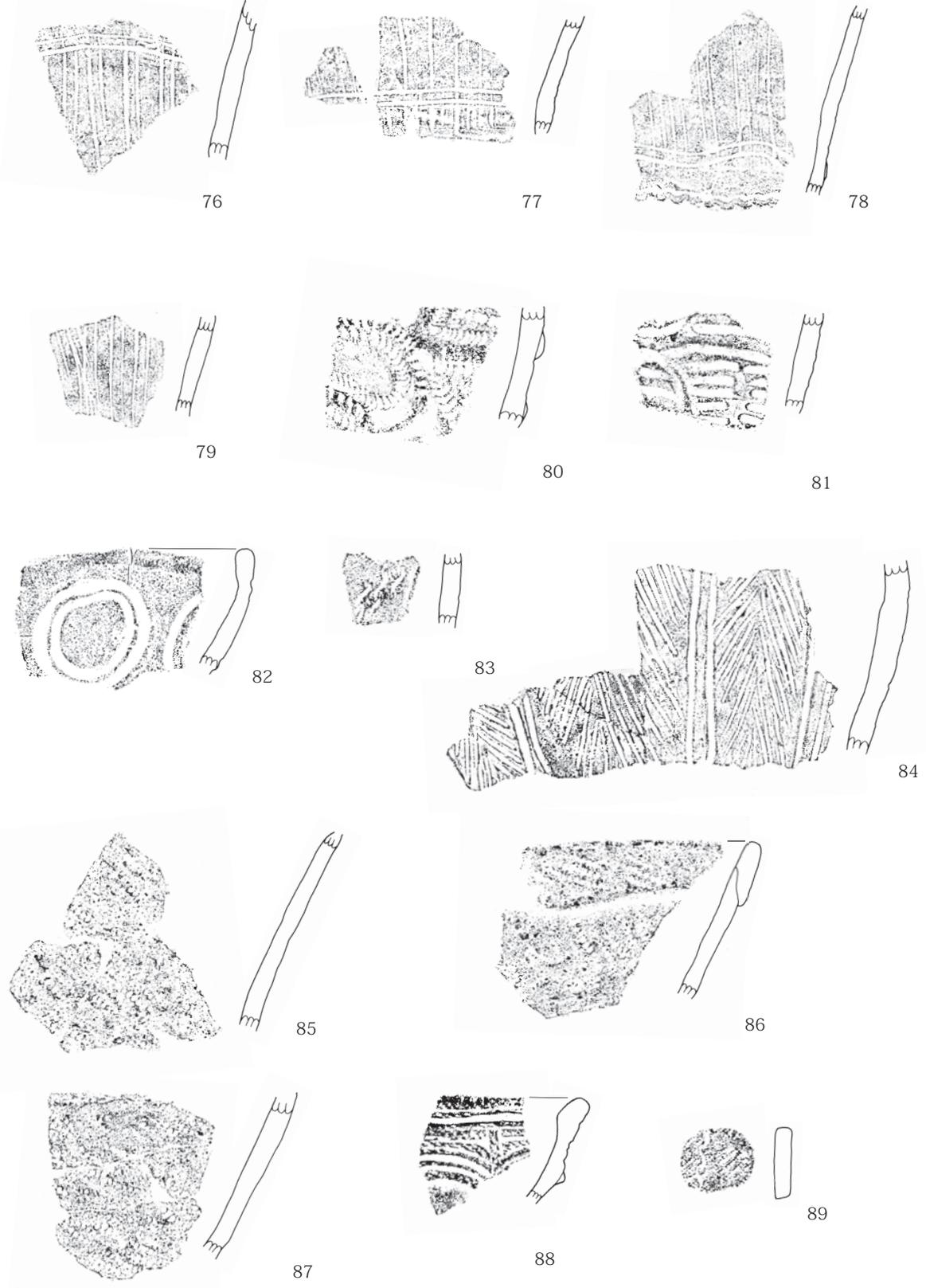
46 ~ 59

第14図 出土土器(4)

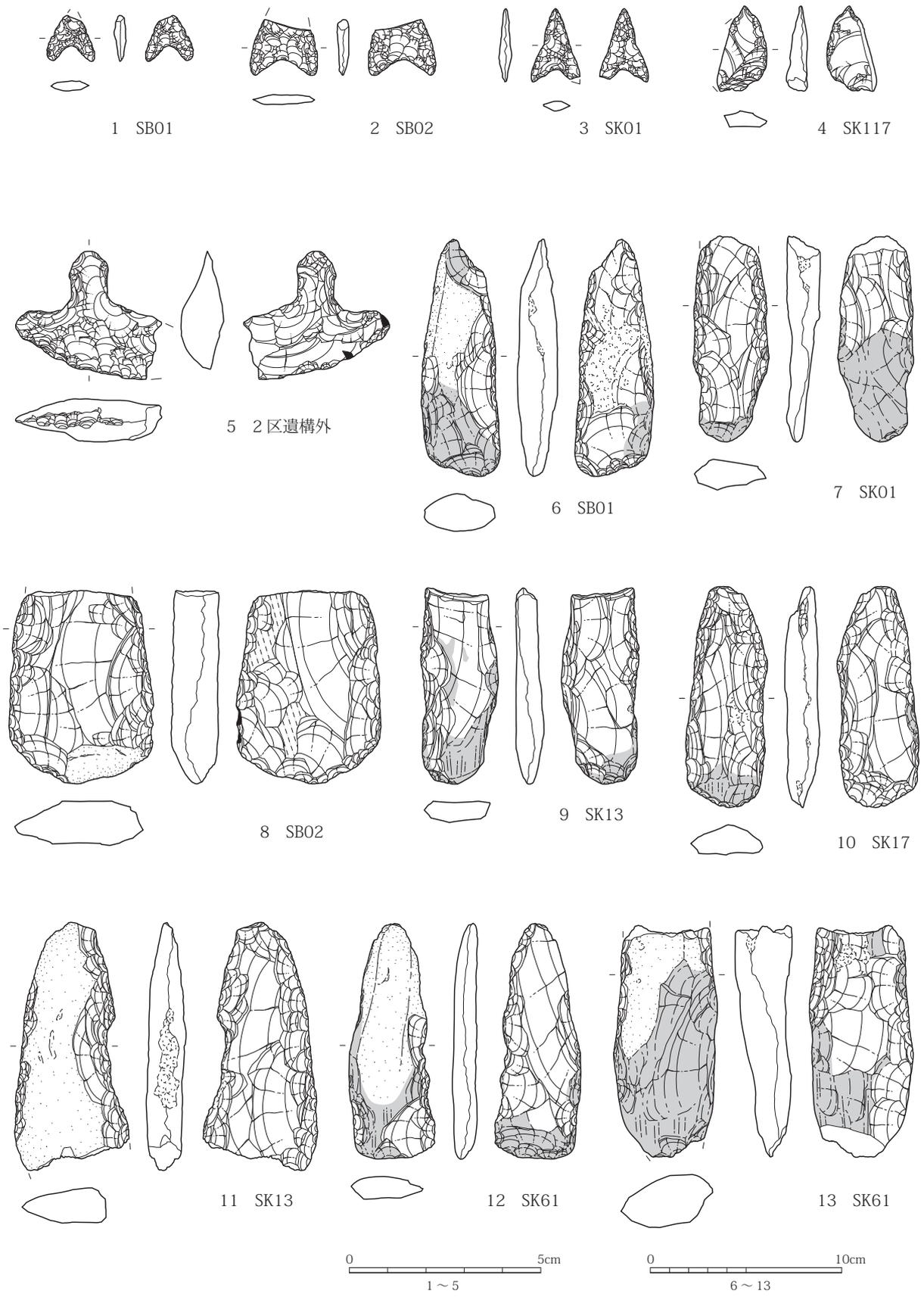


第15図 出土土器 (5)

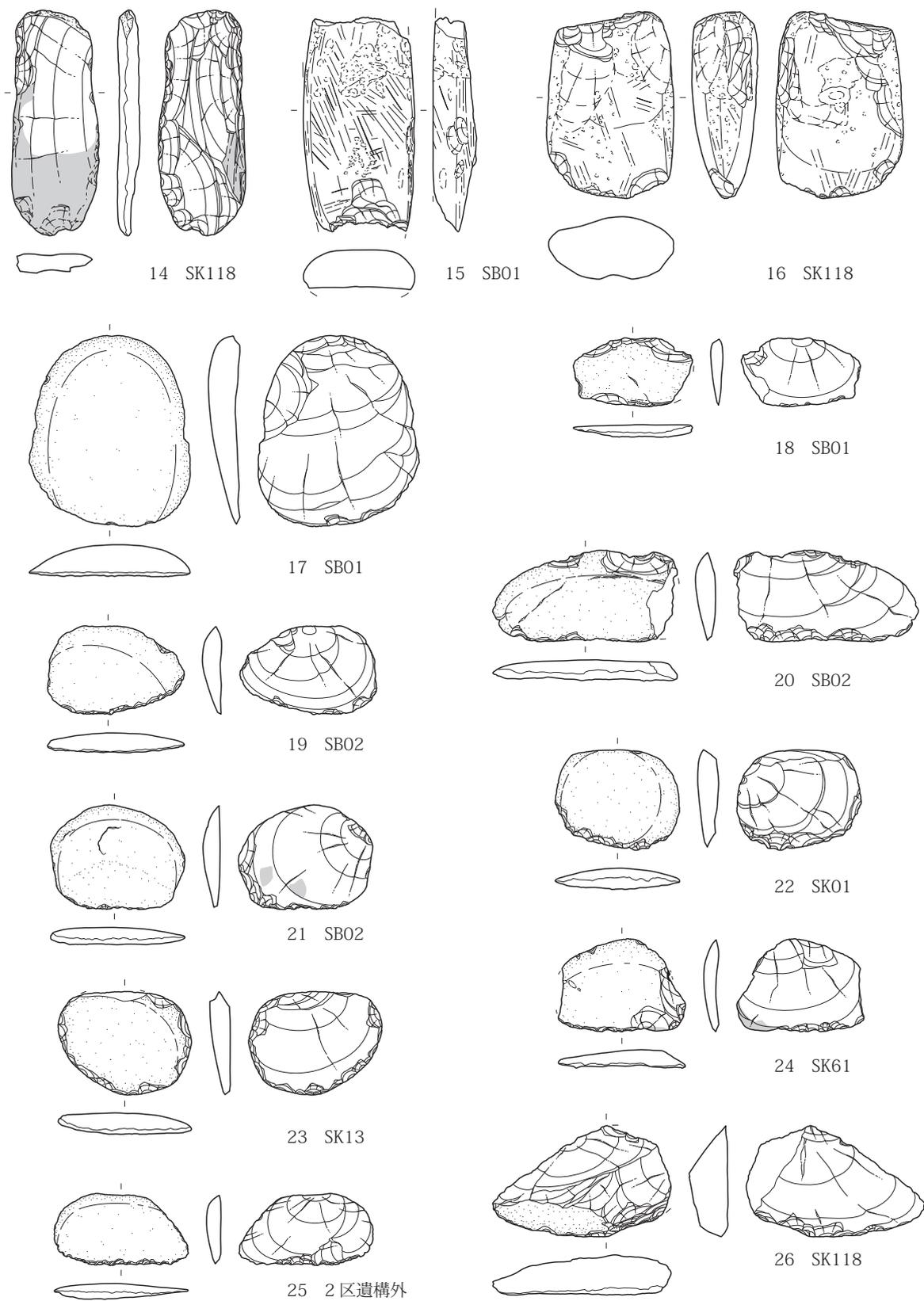
遺構外



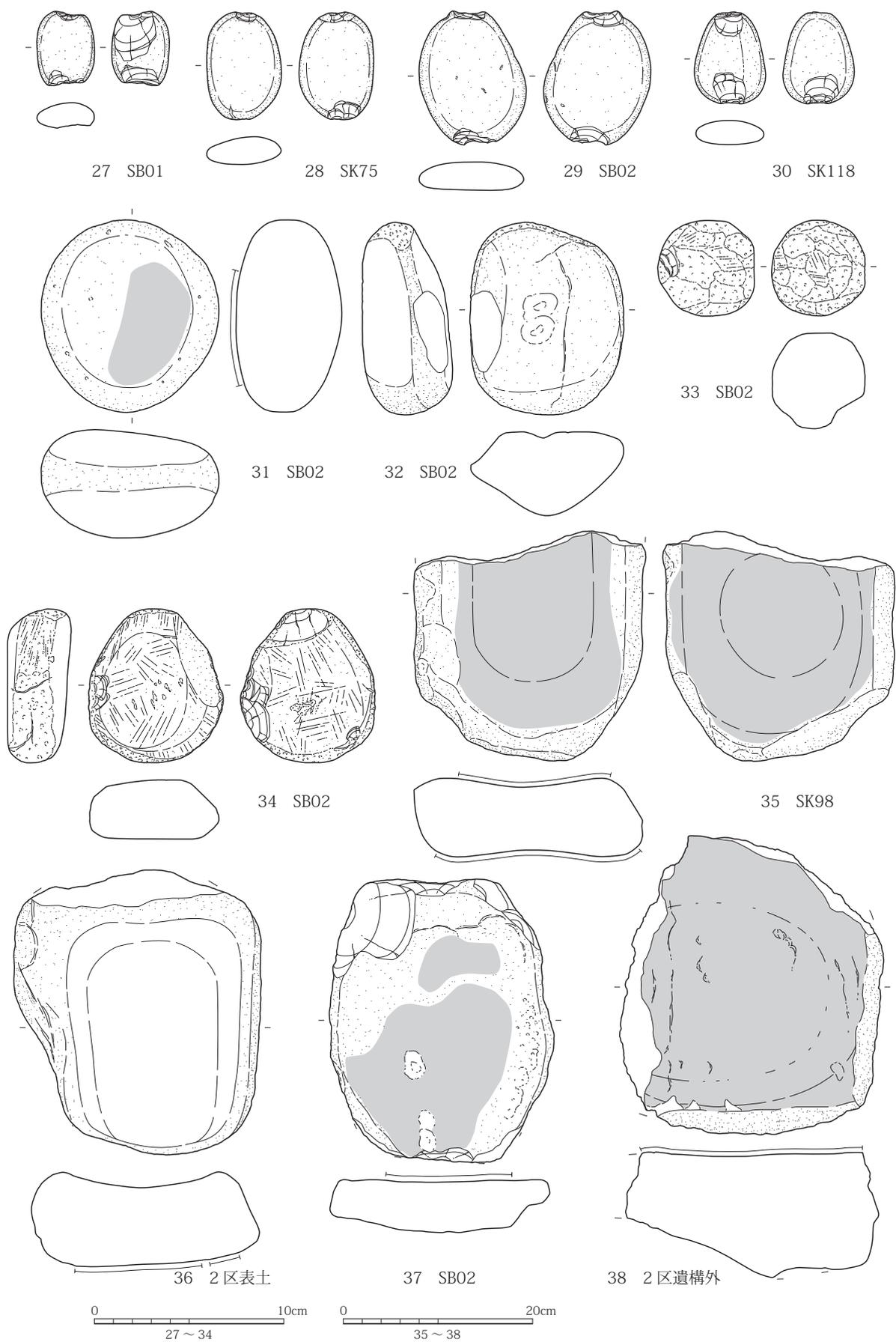
第16図 出土土器(6)



第17図 出土石器(1)



第18図 出土石器(2)



第19図 出土石器(3)



1区調査区全景 東から



2区調査区全景 東から



SB01 完掘



SB01 埋甕炉検出



SB01 磨製石斧出土



SB02 完掘



SB02 土器出土



SB02 土器出土

PL 2 豎穴建物跡 土坑



SB02 埋甕 1 断面



SB02 埋甕 2 断面



SK01 完掘



SK13 完掘



SK15 遺物出土



SK17 完掘



SK22 遺物出土



SK25 遺物出土



SK27 礫出土



SK61 遺物出土



SK75 断面



SK90 遺物出土



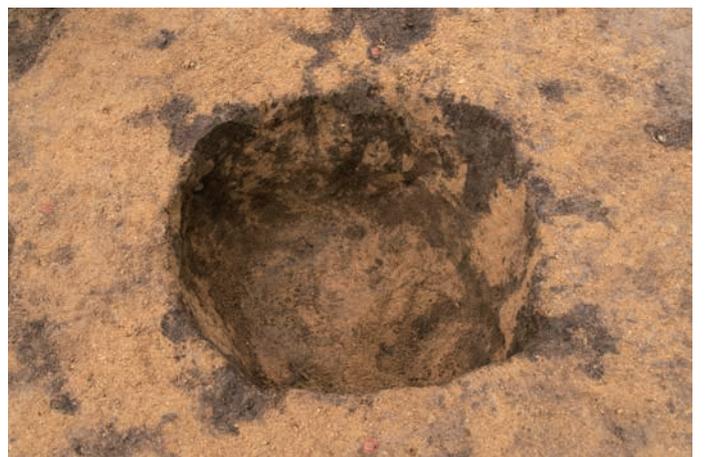
SK91 遺物出土



SK98 石皿出土



SK117 断面



SK118 完掘

PL 4 出土土器(1)

SB01



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10

SB02



11



12



13



SK01



PL 6 出土土器(3)





PL 8 出土土器(5)

SK106



68

SK109



69

SK116



70

SK117



71

SK121



72



73



74



75

遺構外



76



77



78



79



80



81



82



83



84



85



86



87



88



89



# 報告書抄録

ふりがな	はばごんげんどういせき							
書名	羽場権現堂遺跡							
副書名	中央新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 飯田市その1 -							
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	128							
編著者名	藤原直人 鈴木時夫 岡村秀雄 平林 彰							
編集機関	(一財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田963-4 TEL:026-293-5926 FAX:026-293-8157							
発行年月日	2020年(令和2年)12月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘 面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はばごんげんどういせき 羽場権現堂遺跡	ながのけんいだし 長野県飯田市 おおやすみ 大休 1575-1	20205	137	35°52'26" (世界測地系)	137°79'84" (世界測地系)	20190412 ~20190731	500 m <sup>2</sup>	中央新幹線建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
羽場権現堂遺跡	集落跡	縄文時代	中期初頭: 竪穴建物跡1軒 中期後葉: 竪穴建物跡1軒 中期初頭~後葉: 土坑81基		土器(中期)、石器 (横刃型石器、打製 石斧、石鏃ほか)		中期初頭・後葉の集落遺跡。市内において中期初頭の竪穴建物跡の調査事例は希少である。	
要約	遺跡は松川左岸の河岸段丘上に位置する。本格調査履歴はない。 調査の結果、縄文時代中期初頭~中期後葉の集落跡が確認された。発見された遺構は竪穴住居跡2軒、土坑81基、遺構からは縄文土器、石器が出土した。今回、中期初頭~中葉の竪穴住居跡の出土例は飯田地域では稀であり、貴重な資料提示である。また、縄文時代中期初頭の土坑から出土した土器の中には他地域の特徴を持つ資料が見られ、当該期の地域間交流を考える上でも良好な資料である。							

令和2（2020）年12月22日 発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 128

## 羽場権現堂遺跡

中央新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

－飯田市内 その1－

発行者 東海旅客鉄道株式会社  
（一財）長野県文化振興事業団  
長野県埋蔵文化財センター  
〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4  
Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157  
E-mail info@naganomaibun.or.jp

印刷者 大日本法令印刷株式会社  
〒380-0935 長野県長野市中御所 3-6-25  
Tel 026-228-1946 Fax 026-226-2649